

21世紀COEプログラム「日本発信の国際日本学の構築」研究成果概要

著者	星野 勉, クライナー ヨーゼフ, 安孫子 信, 王 敏, 山中 玲子, 吉成 直樹
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	5
ページ	11-86
発行年	2007-05-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/00022597

21世紀COEプログラム 「日本発信の国際日本学の構築」研究成果概要

星 野 勉

一 研究目的

「日本発信の国際日本学の構築」を目指す本拠点形成の基本コンセプトは、「異文化研究としての日本学」である。この基本コンセプトのもとに、次の四つを研究目的として掲げた。

- 1) 第一の目的は、外国の日本学研究者（=他者）の視点を取り入れて、日本文化を「異文化」視するという研究姿勢のもとで、「国際日本学」の方法論を確立することである。そのかぎりで、「国際日本学」の構築とは、開かれた研究姿勢のもとでの内と外との対話の実践を通じて、内外の学問的な対話の成立する条件を探究するというメタサイエンスに従事することを意味する。それはまた、「国際日本学」という明確な方法論に裏づけられた新しい学問領域を確立することによって、内向きの閉鎖的な研究姿勢と希薄な方法意識という、わが国の人文科学研究の旧弊を打破し、国際的・学際的な共同研究のあるべきモデルを提示することを目指している。
- 2) 第二の目的は、「異文化」という観点から日本文化を再発見、再発掘し、日本文化研究に新局面を切り拓くことである。

日本を「異文化」として対象とする外国の「日本学」研究には、「比較」の視点が必ず含まれているが、この「比較」の視点（とりわけ、日中、日独、日仏比較の視点）から、日本文化を、捉え直すことによって、日本文化のこれまでとは異なる新局面を再発見、再発掘する。また、「世界無形遺産」に認定された「能楽」を「国際日本学」という枠組みのなかに位置づけ、「比較」の視点から捉え直すことによって、「能楽」研究の新局面を切り拓く。さらにまた、南の境界領域である「琉球・沖縄」に目を向ける

ことによって、日本文化が、均一で同質的な「ひとつの文化」ではなく、中国、朝鮮などのアジア地域へと越境する、多元的な「異文化」起源と多様な構造を有する「いくつもの文化」であることを解明する。

- 3) 第三の目的は、国の内外の研究者・研究機関とのネットワークを有効に活用し、リアル・タイムで研究情報を共有して、グローバルな規模での共同研究活動を推進することである。そのために、日本研究という観点から価値あるコンテンツを電子資料化（デジタル化）し、それを世界に向けて公開する「電子図書館システム」を構築する。
- 4) 第四の目的は、COEプログラム「日本発信の国際日本学の構築」の研究推進によって得られた成果を国際日本学インスティテュートでの大学院教育に生かすことによって、発信能力のある「日本学」研究者の育成をはかることである。

二 中間評価を受けての研究実施計画の見直し

平成16年度半ばの、「21世紀COEプログラム委員会」による中間評価の結果を受け、本拠点の研究目的を実効的に実現するために、重要な研究目的は確保しながらも、研究実施計画の大幅な見直しを行った。その具体的な改善策は以下の通りである。

- 1) 拠点リーダーの交代。
- 2) 従来の8つのタスクフォースを4つのタスクフォースに整理・統合する。
これは、残りの2年間に確実な研究成果を見込むことができる部門への絞込みであると同時に、機動的な研究連携を達成するための措置である。

- ・タスクフォース①：国際日本学研究センター担当
課題：タスクフォース間の連携とメタサイエンスによる方法論の確立
- ・タスクフォース②：国際日本学研究所担当
課題：外国（当面は独・仏・中に限定）の日本文化研究の総体的研究（分析・評価）
- ・タスクフォース③：野上記念能楽研究所担当
課題：世界の中の能楽

・タスクフォース④：沖縄文化研究所担当

課題：国際沖縄学の構築

- 3) 拠点リーダー、各チーム・リーダーのコーディネーターとしての役割を明確化すると同時に、事業推進担当者の問題意識および研究方法の共有化を通じて、タスクフォース間の連携を強化する。
具体的には、事業推進担当者を加えた国際日本学研究センター・国際日本学研究所拡大運営委員会を月一回定期的に開催する。外部の第三者評価委員会を設けて、これまでの事業全体の点検評価を行う。
- 4) 「国際日本学」構築に向けての理論的研究を強化する。
- 5) 「能楽」、「琉球・沖縄」に関する研究を「国際日本学」という観点から見直す。
- 6) 若手研究者育成強化のための具体的な措置をとる。
学術研究員および「研究奨励金」制度の導入、『紀要』の発行など。
- 7) 研究推進によって得られた成果を、『研究叢書』などに結実させる。

三 研究成果

- 1) 「国際日本学」の構築に向けて

2005年12月1～3日パリ日本文化会館を会場に開催された国際シンポジウム「日本学とは何か－ヨーロッパから見た日本研究、日本から見た日本研究－」、2006年11月18、19日法政大学を会場に開催された国際シンポジウム「国際日本学－ことばとことばを越えるもの」などにおける内外の日本文化研究者との共同作業を通じて、「国際日本学」の構築に向けて着実な一歩を踏み出しつつある。

「比較」の視点を生かした「反照的原理 (reflective principle)」（Josef. A. Kyburz）は、事例研究を経て、「国際日本学」の方法論として有効性が確かめられつつある。また、わが国において「翻訳」を通じて異文化が受容されてきた事実に注目し、そこで生起している事態の解明を通じて、異なる「準拠枠（＝意味コード）」間での文化理解、文化伝達の可能性などを探究している。そのさい、問題意識を共有する外国の日本文化研究者との共同研究を通じて、異文化理解、異文化間対話の現場に身を置きながら、

その現場から理論構築をはかると同時に、その現場で理論を検証するというやり方を採用している。こうした作業は、「関係性の解釈学」(Shingo Shimada)という理論的な裏づけも得て、内外に開かれた「国際日本学」の構築に向けて実を結びつつある。

2) 「比較」の視点の導入による日本文化の再発見、再発掘

◇日本文化を中国をはじめとするアジアのなかに改めて位置づけ直すと同時に、それに比較文化の視点からアプローチすることによって、日中文化の同質性と異質性とを解明しつつ、相互理解の可能性を探りつつある。これは、学術研究でありながら、時代の要請にも応えるタイムリーな研究でもあり、内外からの注目度も高い。また、それに連動して、中国における日本文化研究の中心的な大学・研究機関とのネットワーク作りも着実に進行している。

◇「能楽」に関する研究が、改めて「国際日本学」という枠組みのなかに位置づけられることによって、新たな問題意識、方法意識が惹起され、これまでにはない開かれた研究姿勢とも相俟って、新たな展開を見せ始めている。それは、2006年12月15、16、17日に法政大学を会場として開催された国際日本学研究集会「能の翻訳を考える－文化の翻訳はいかにして可能か」における内外の能楽研究者の白熱した議論と対話とのうちに認めることができる。

◇琉球・沖縄研究に関しては、外国の沖縄研究者の外の視点、沖縄の沖縄研究者の内の視点、そして、奄美そして本土の沖縄研究者の内でもなければ外でもない視点を交差させることによって、「いくつもの琉球・沖縄像」を浮かび上がらせた。また、「日本の中の異文化」として位置づけるならば、琉球・沖縄の文化は、日本の文化との同質性を孕みながら、アジアへと越境するところに異質性を認めることができるが、そこにまた日本文化の重層的で多様なあり方の雛形を認めることもできる。ここに琉球・沖縄研究の積極的な意義を認めることができる。

3) 「電子図書館システム」の構築

日本研究という観点から価値あるコンテンツを電子資料化(デジタル化)し、それを世界に向けて公開する「電子図書館システム」を構築する作業

は順調に進んでいる。

4) 若手研究者の育成について

学術研究員および研究奨励金制度の導入、学術研究員研究会の開催、紀要『国際日本学研究』の刊行などを通じて、若手研究者の育成に当たっている。また、国際日本学研究集会「能の翻訳を考える－文化の翻訳はいかにして可能か」の初日には、大学院ゼミ「謡曲の英訳を読む」の報告と実際に「千手」、「田村」の英訳を読むワークショップを行い、内外の研究者とも問題意識を共有できるように努めた。現在、研究所での研究活動を大学院インスティテュートでの教育活動にフィードバックしつつ、両者のより組織立った連携のあり方を模索している。

COEテーマタスクフォース①

国際日本学の理論構築とタスクフォース間の連携

星 野 勉

一 活動報告

以下に、中間評価結果以降の活動報告を記す。

1) 拡大運営委員会の月一回の開催

月一回拡大運営委員会を開催し、情報・意見交換を通じて、タスクフォース間の連携の強化と研究内容の相互的な点検とを実施した。

2) 『ニュース・レター』の年3回の定期的な発行

事業内容の全容を掌握するとともに、それを周知するために、これまでの『年報』に加えて、『ニュース・レター』を年3回定期的に発行した。

3) 研究会およびシンポジウムの開催

「国際日本学」とは何であるか、その概念内容の明確化と方法論の確立に向けての研究会、ワークショップを、2005年12月に開催されたパリ・シンポジウムに先駆けて計6回、さらにその成果を検討するために計4回開催した。こうした研究成果を集約する意味で、2006年11月18、19日に法政大学を会場として国際シンポジウム「国際日本学—ことばとことばを越えるもの」を開催した。

4) 刊行物

1. 21世紀COE国際日本学研究叢書2『国際日本学の構築に向けて』2005年12月
2. 21世紀COE国際日本学研究叢書6『日本学とは何か—ヨーロッパから見た日本研究、日本から見た日本研究』（日英二ヶ国語）2007年3月
3. 21世紀COE国際日本学研究叢書7『国際日本学—ことばとことばを越えるもの』2007年3月

二 「国際日本学」とは何か

2005年12月1日～3日、パリ日本文化会館を会場として、国際シンポジウム「日本学とは何か—ヨーロッパから見た日本研究、日本から見た日本研究—」が、法政大学国際日本学研究所、フランス国立科学研究センター、パリ日本文

化会館の協力のもとに開催された。このシンポジウムで発表した日本研究の研究者は、国別に見れば、日本9名、フランス3名、ドイツ3名、韓国、アメリカ、イギリス、ベルギー各1名の計19名であった。これは、外国の日本研究事情についてのたんなる情報交換を超えて、日本という内の視点とヨーロッパという外の視点の双方から日本研究を検証し、それを通じて「国際日本学」とは何かを問う、きわめて意欲的かつ実りの多いシンポジウムであった。

このシンポジウムにおいて、私たちは、日本研究を内外で分かち溝は何であるか、そして、その溝を架橋することは可能であるか、という問いに直面しながら、内外に開かれた「国際日本学」の可能性を模索するという難題に取り組んだ。ところで、異なる文化的背景をもつ内外の研究者が日本文化について学問的な対話を交わすことができるためには、その前提として、異文化理解の可能性、文化の翻訳可能性が担保されていなければならない。すなわち、「国際日本学」の構築をはかるためには、それに先立って、異文化理解の可能性、文化の翻訳可能性の問題に決着を付けておかななくてはならない。そして、パリでのシンポジウムは、異文化間の対話の現場に身を置きながら、異文化理解の可能性、文化の翻訳可能性を探究しながら、「国際日本学」の可能性を模索するという、類のない、文字通りチャレンジング(challenging)な学問的な実践でもあった。

そこで提起された問題は、その後、研究会、ワークショップ等を通じてさらに深化され、2006年11月18、19日の法政大学における国際シンポジウム「国際日本学-ことばとことばを越えるもの-」に引き継がれた。私たちは、こうした経緯を踏まえ、「翻訳」から見えてくるものを手がかりとして、「国際日本学」とは何かという問いに対する、一つの解答を試みようとしてきた。それはまた、日本研究を内外で分かち溝は何であるか、その溝を架橋することは可能であるか、そして、可能であるとすればどのようにしてか、という「国際日本学」の成否にかかわる問題に、異なる「準拠枠=意味コード」間での文化理解、文化の翻訳可能性・不可能性という、より根本的な問題にアプローチするなかで、答えようとするものであった。

一 「翻訳」から「関係性の解釈学」へ

内向きの閉鎖的な研究姿勢と希薄な方法意識という、わが国の人文科学研究の旧弊を打破して、内外に開かれた「国際日本学」を構築しうるためには、異文化間での相互理解を可能としうる場面があらかじめ切り拓かれていなくてはならない。したがって、まずもって、異文化理解は可能であるのか、という難題が解かれていなくてはならない。この問題に答えるにあたり、わが国において「翻訳」を通じて外来の異文化が摂取され、受容されてきたという事実に着目して、異文化理解の可能性の問題を文化の翻訳可能性の問題と絡めて取り扱うことが有効である。そのさいまた、ヨーロッパ哲学の伝統のなかで「理解」の問題を取り扱ってきた「解釈学」をその基礎理論として拠り所とすることが有効である。もっとも、それをそのまま受容するのではなく、それを見直すことも同時に必要ではある。そして、このような観点から異文化理解の可能性もしくは不可能性を考察する上で有力な手がかりとなりうるのが、島田信吾の提唱する、いわゆる「関係性の解釈学 (relational hermeneutics)」である。

島田の「関係性の解釈学」は、文化の接触、転移、受容がそこでなされる「翻訳」という実践に着目する。まず強調されるべきは、「翻訳」において、もとの言語表現における意味と翻訳された言語表現における意味の等価性を保証するものは何もないということである。その意味で、「翻訳」という実践は、翻訳不可能性と背中合わせにありながら、翻訳可能であるという根拠のない確信のもとに、いわば強行される。そして、「翻訳」という実践こそが、不可能を可能にする。それは、定まりなく揺れ動く水面 (みなも) に「浮き橋 (floating bridge)」を架ける作業に準えられる。しかも、たとえば、能の謡曲のような特異なテキストの「翻訳」が、それが優れたものであればあるほど、対象となる言語 (たとえば、英語) の言語表現に新しい可能性を切り拓きうるように、「翻訳」においてこそ、私たちは、新しい意味の発生と地平の拡大とに立ち会うのである。というのも、ある言語表現を翻訳するにあたってそれを理解しようとするれば、自分たちの言語や文化のうちでそれに対応するもとの異同を比較・対照することが必要になるが、この比較・対照において、他なるもとの対決はもとよりのこと、自分を自分から疎隔し、自己との批判的な対決が不可欠となるからである。すなわち、優れた「翻訳」においては、翻訳者

自身も、読者も、自分を自分自身から遠ざけ、自分から離れたところから、異文化=他者と出会い、そして、自文化=自己へと還っていくということが起こりうるのである。

この不可能を可能にする「翻訳」という実践に準えるならば、内外の研究者と共同で日本文化研究を展開する「国際日本学」とは、異言語・異文化の聞き手への語りかけの構えをとることによって、非連続性において連続性を、共約不可能性の場面で関係性を創り出す学問的な実践にほかならないと定義することができる。

二 「国際日本学」方法論としての「比較」

「比較」といっても、共通の普遍的な「準拠枠=意味コード」が諸文化を超えたところにあるわけでもなければ、中立的な概念もしくは諸文化を架橋するような概念を提供しうるような言語が諸言語を超えたところにあるわけでもない。それゆえに、異文化の他者性を把握し理解することができる枠組みをあたかもアプリアリにもっているかのように比較を進めることができると思うとすれば、それは幻想である。

また、「比較」は、すでに出来上がって凝り固まったものとしてある、二つの異質の文化間をただ行き来するだけのことには留まらない。その場合には、たとえ魅力的な憧れの対象であろうとも、異文化を自分たちの住まう空間とはまったく異質の空間として遠ざける「エキゾティズム」か、それとも、自分たちの見方を未知の異文化のなかに投げ入れ、それを自文化に還元可能なものとする「エスノセントリズム」か、このいずれかの陥穽に嵌まり込むのが落ちである。

これに対して、『菊と刀』におけるルース・ベネディクトは、「文化相対主義」に裏打ちされた「比較」によって、異文化(=日本文化)と自文化(=アメリカ文化)の差異に「自分自身を慣らし」つつ、異様なもの、矛盾するものと思われていた異文化(=日本文化)を首尾一貫したものとして捉え返すことに成功する。そして、『菊と刀』の読者は、このような展開を追っていくうちに、異文化のうちに自分たちとは別の整合的な信念体系があることを認めさせら

れ、また、「内の視点」とは違った「外の視点」があることを気づかされる。いや、そればかりではない。アメリカの文化人類学者ギアーツによれば、読者は、さらに、異文化を異文化視する視点を自文化に向け返すことを余儀なくされるといふ。これによって、自分たちの視点が相対化され、自分たち自身の「準拠枠＝意味コード」そのものが揺り動かされる。「比較」の徹底によって、このように自分自身に対して距離をとる姿勢が呼び起こされるが、ここにおいて、彼我の文化的な差異を認識や理解の上でポジティブなものとしていく可能性、さらには、異文化＝他者との真の出会いの可能性も切り拓かれてくる。

「比較」のもつこのような可能性は注目に値する。「比較」は、文化の「比較」という意味でも、また、視点の「比較」という意味でも、次のような批判的かつ創造的な意味をもつと思われる。

1) 文化の比較

日本を「異文化」として研究対象とする外国の「日本学（＝日本研究）」には、「自文化」（たとえば、ベネディクトの『菊と刀』の場合であれば、アメリカ文化）との「比較」という視点が必ず含まれている。この「比較」において、「異文化」との対決はもとよりのこと、「自文化」を自分から疎隔し、それとの批判的な対決が同時に不可欠となる。すなわち、「比較」という視点から光が当てられることによって、日本文化が、それを「自文化」とする日本人にとっても、これまでとは違った相貌を呈するようになるばかりではない。「異文化」としての日本文化が一つの像を結ぶようになれば、それとの相関において研究者自身の背景となっている「自文化」もまた、浮き彫りにされるのである。ちなみに、ベネディクトの『菊と刀』はこのような研究のもっとも優れた事例の一つである。

ジョセフ・キブルツは、鏡の比喻を用いて、「自文化」との対比において「異文化」を照らし出し、「異文化」との対比において「自文化」を照らし返すことによって、差異を際立たせつつ、自他の文化を浮き彫りにするという「反照的原理（reflective principle）」を文化比較の方法論として提唱している。キブルツによれば、そのさい自他の文化の差異の認識がきわめて重要であり、この差異の認識によってこそ、「異文化」の理解ばかりか、「自文化」の理解もま

た深めることができる。しかも、ヨーロッパ文化にとって日本文化は対極をなすだけに、鏡の比喩による「比較」がより有効に機能することを期待しようという。

日本文化という同一の対象を内と外という異なる光源から浮かび上がらせる「相補的な鏡のシステム」を基礎とするキブルツの「反照的原理」は、彼自身の具体的で実証的な研究と相俟って、「国際日本学」の方法論に有力な手がかりを与えうるものである。そればかりか、日本研究に限らず、地域研究の一つの新しいモデルを提示するものでもある。というのも、それは、桑山敬己が指摘している、従来の欧米中心の「文化人類学」では顧みられることのなかった、記述される研究対象の視点を、欧米の研究者と対等の研究主体として立ち上げ、地域研究の共同研究者として取り込むという意味で、きわめて建設的な提案であるからである。

2) 視点の比較

内と外という異なる視点がぶつかり合うことによって、内の視点が相対化される。確かに、内の視点は特殊なものでありながら、それを「準拠枠」として生きる人々にとっては、アイデンティティを構成し、その外に出ることができないという意味において絶対的なものでもある。したがって、あたかも眼鏡を取り外すかのように、その視点を取り外し、「準拠枠」から抜け出すことができるわけではない。しかし、外の視点の存在を認め、自分の視点が一つの視点であることを自覚することによって、自分の「準拠枠」を見直し、その幅を拡張することはできるはずである。

「比較」において、他なるものとの対決はもとよりのこと、自己を自己から疎隔し、自己との批判的な対決が不可欠となるが、この自他との批判的な対決を通じてこそ、「異文化=他者」と出会い、そして、「自文化=自己」へと還っていくということが起こりうる。

異文化間の対話を導く共通の基盤や異文化間を架橋するような一般的な「準拠枠」があらかじめ存在するわけではない。それゆえに、異文化間の対話は産み出されなくてはならない。そのさい、対話の場は、互いに他の文化をみずからの文化を限界づけるものとして働かせることによって、言い換えれば、文化

的伝統・風土を異にする者が互いに他者を照らし出しつつ、みずからの内を照らし返すという実践のなかで、はじめて開かれる。

こうして開かれる異文化間の「対話の場」こそ、内外の研究者と共同で日本文化研究を展開する「国際日本学」の足場にほかならない。それは、フランソワ・ジュリアンの「比較」に認められる、特殊な諸文化を相互に異質なものとして出会わせながら、しかも、そこに何らかの触れ合いをつくり出していく学問的实践に準えることができる。

COEテーマタスクフォース②-1

西欧（独・仏）・中国の日本文化研究の総合的研究

ヨーゼフ・クライナー

ドイツの日本文化研究の総合的研究

主な研究テーマをドイツ及びドイツ語圏における日本研究の現状とし、それを討論する場として、2005年10月、法政大学にて国際日本学シンポジウムを開催した（ドイツ語圏における日本研究の現状）。また、ドイツのみならず全世界における日本研究の状況（現状）を把握するため、2006年2月にはドイツ・ボン大学において国際シンポジウムを開催した。そこでは、ドイツ、オランダ、オーストリア、イギリス、イタリア、アメリカ、そして日本から計20人の研究者を招き、日本研究の各専門分野にわたって最近30年間の動向や現状を報告、討論を行った。この報告（ペーパー参加のものを合わせて）は目下英語で編集集中であり、今秋にはボン大学出版会から刊行する予定である（約600頁、仮題：“Current State and Future Developments in Japanese Studies”）。

さらに、この広いテーマの中で、特に民族学・文化人類学の研究動向に目を向け、この関係で主に以下二つの問題を取り上げて論じてきた。

まず第一は文化人類学の領域における中部ヨーロッパのドイツ語圏及び日本との交流、特に20世紀を通じて行った相互関係（方法論中心）である。これについては2007年1月に東京・成城大学で「戦後民俗学／民族学の理論的展開・ドイツと日本を視野に」というテーマで国際シンポジウムを組織し、討論を行った（このテーマは成城大学が計画・申請したグローバルCOEプログラム「常民概念を核とするグローバル研究」にまでに発展した）。

また、日本文化研究には新たなパラダイムの転換が必要ではないかと考え、文献学的なアプローチを中心としたジャパノロジーや社会科学的日本研究に加え、今後は海外の博物館・美術館に保管されている歴大な数にのぼる資料を視野に入れ、真の意味での総合的日本研究を作り上げなければならないと感じた。

その取り組みの第一歩として、ヨーロッパの博物館、資料館の日本コレクション担当の学芸員を招き、トヨタ財団の援助を受け2003年9月にボンで国際シンポジウムを開催：Japanese Collections in European Museums（同タイトルの報告書を2005年ボンで刊行、2巻、計1030頁）。目下、追加調査した17カ所の博物館の報告を編集した上で、今秋までに新に報告書の第3巻を出版する予定である。

そして、この報告を分析し、ヨーロッパにおける日本観の形成におよぼした影響と、その背景を基に行われた日本研究の展開の調査・研究を試み、まず、法政大学主催のパリ（2005年12月）と東京（2006年10月）の各シンポジウムで報告を行った。

なお、その一環として、モーツァルト生誕250周年にあたった2006年に「モーツァルトと日本」というテーマを取り上げ、それについて2006年3月にロンドン（大英博物館）、ボン大学、三鷹市で講演し、論文をまとめた。

第二には沖縄研究が日本における文化人類学の学説形成におよぼした影響である。

日本文化の多様性を強調する一つの手がかりとしては沖縄研究に力を入れてきた。特に日本民俗学・民族学の学説形成における沖縄（南西諸島）研究の役割についての研究を重ねた。第4回国際沖縄研究大会（ボン）では英文報告を編集出版（2006年）した。それに続く報告として2006年7月に琉球大学での講演「日本民族学・文化人類における南西諸島の役割」を始め、2006年9月にはイタリア・ヴェネツィア大学で開催された第5回国際沖縄研究大会（The Role of Okinawan Studies in the Theory- building of Japanese Ethnology）、2007年3月には東京・沖縄協会で講演「沖縄研究の国際的状況」をし、徐々にテーマを掘りさげていった。

なお、ヴェネツィアの沖縄研究大会では、住谷一彦（立教大学名誉教授）と共に国際沖縄学会の設立を提案し、そのスタートにあたり、法政大学から事務面での援助を取りつけた。さらにこの間、研究協力体制を下記のように国内外に広く確立することができた。

■大学：

- ・ 成城大学（民俗学研究所）
- ・ 早稲田大学（琉球・沖縄研究所）
- ・ 琉球大学（大学院人文社会科学研究科）
- ・ ボン大学（近現代日本研究センター）
- ・ ヴェネツィア大学（沖縄研究）
- ・ ロンドン大学（SOAS）

■博物館：

- ・ 東京国立博物館とドイツ連邦政府美術展示場（ボン）：2003年 東博特別展、2008年 醍醐寺の秘教美術特別展での顧問、図録担当。
- ・ 国立科学博物館：文部科学省科学研究費補助金 特定領域研究「江戸のモノづくり（我が国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査研究）」への協力。
- ・ 国立民族学博物館：プラハ・ヴェネツィア、パリ各東洋美術館との共同調査。
- ・ ENJAC European Network of Japanese Art Collections（ヨーロッパ）：ボン及びプラハでのシンポジウムを組織

COEテーマタスクフォース②-2

西欧（独・仏）・中国の日本文化研究の総合的研究

安孫子 信

フランスの日本文化研究

国際日本学は、日本人自身が行う日本についての研究（いわば日本日本学）と外国人が行うそれ（たとえばフランス日本学）とを緊密につなぎ、日本（とくに日本文化）が国際的にさらに活発な関心の対象となるように努める試みである。この試みは、内と外によるこの共同作業を具体的にやっていくことと、共同作業を巡っての原理的・方法論的な諸問題を問うこと、つまりは実践と理論の二側面を有している。しかるにその理論面を内外の共同作業で行っていくとすれば、それはすでに国際日本学の実践ともなるのである。国際日本学のこうした意味での実践が2005年12月フランス・パリでの国際シンポジウム（「日本学とは何か」）で行われ、その成果が2006年2月以降、公開研究会や公開講演会、報告会の形で検討された後、それらを受けて行われたのが、同年11月18日-19日の東京（法政大学）での国際シンポジウム（「ことばとことばを越えるもの」）であった。こうして、研究の積み上げの必要から一定の固定した研究者との間のもものではあったが、途切れない形で共同作業を継続できたことをまずは一大成果と考えたい。

これらはフランス日本学との間においてもそうだったのであり、フランス日本学との継続的な共同作業を通して、国際日本学の原理的・方法論的問題を問う作業には一定の前進と成果が得られた。すなわち、これら一連の共同での検討において、フランスとの関係では、同国における日本学の主要な3つの関心と、主要な3つの方法とをよく代表する人々と交流が行われた結果、国際日本学の問題点と可能性との検討は大いに促進が図られたと考える。3つの関心というのはほぼ時代区分に対応したものである。すなわち、①中国とは無論出会っていたが、西洋が全面的に移入される以前の古代・中世・近世日本文化への関心、②西洋が全面的に移入され始めた近代日本文化への関心、そして、③西洋と全くシンクロナイズされて、グローバル化の真っ只中にある現代

日本文化への関心の3つである。そして3つの方法というのは、(1) 観察や体験、共感といったことば以前の、そしてことばを超えたアプローチに赴こうとする文化人類学的方法、(2) 徹底したテキスト読解と分析に赴こうとする文献学的方法、(3) フィールドワーク、社会調査やアンケートを駆使する社会学的方法の3つである。

今回のフランス日本学との共同作業では(一定の固定した研究者との間のものではあったが)、あたかも自ずからのように、①は(1)と、②は(2)と、③は(3)と結ばれていた。これは研究対象の存在の仕方が、①ではテキスト以前の、すなわち、文献の継承はまれであり、主要な文化的成果は多く文献以外であるから(ex.古代美術)、②ではテキスト的、すなわち、主要な文化的成果が文献で示され、それが同時代的文献に全面的に伴われているから(ex.近代思想)、③ではテキスト以後的、すなわち、文化的成果も、その波及効果も、もはや文献という形を必ずしもとらなくなっているから(ex.現代サブカルチャー)、であるとも説明されよう。

いずれにしても、このようなメリハリのある仕方方法が適用されている結果、フランス日本学はその成果として、われわれ日本人研究者の目を開かせるものを、つまりはわれわれ日本人研究者を狭い日本日本学を超えて国際日本学の構築へと否応なく赴かせるものを有していると改めて今回確認できた。すなわち、それぞれの場合に、日本日本学がそのままでは恐らく気づき得ないような知見が、明らかにもたらされているのである。①ではフランス日本学は、その文化人類学的方法によって、一方で普通の日本人の体験をはるかに超えて深く内にある美術作品を体験しつつ、他方なおかつその際そこに残っている外からの視線によって、その作品を、結局、内と外から同時に、内外が相互に相照らす仕方(reflexiveに)鑑賞しえているのである。また、②ではフランス日本学は、質量で普通の日本人研究者に十分匹敵する日本語文献の渉猟を行いつつ、あるテキストの解釈論争を、日本人研究者の決して立ち得ない外の視点から、テキストのみならず論争そのものをも含めて丸ごと分析するに至るのである。さらに、③ではフランス日本学は、ここでも日本人オタク顔負けの熱中で日本のサブカルチャーに浸りつつ、それが日本社会でのみならず外で、フランス社会で、どのように受容されているのかを各方面から綿密に統計的に

解析しえているのである。

こうしたフランス日本学の成果の例を今回の共同研究者のそれから引けば、①ではジョゼフ・キブルツ氏（フランス国立科学研究センター）が行った円山応挙の「波上白骨座禪図」の解釈、②ではアニック・ホリウチ氏（パリ第7大学）の現在日本での「丸山眞男論争」の分析、③ではジャン＝マリ・ブイス氏（パリ政治学院）が展開した日本マンガ論を挙げよう。それぞれに特徴的なのは、先ほども触れた「反照的原理」であって、これらの研究では、日本についての、日本人顔負けの内からの知見・経験を、同時に外からも眺めえていて、そこから日本文化の未聞の相をあぶり出すことに成功していると言える。その相とは押しなべて言えば、日本文化の多層性、雑種性を示すものであって、日本文化はそれを単に日本的と言って済ますことができない外的な要素を普通には見えない形で抱え込んでいるということ、しかも日本文化がバイタリティーや創造性を得てきているのは、そのような普通は見えなくなっている外的な要素からなのだ、ということなのである。

①では、応挙の「波上白骨座禪図」は、挿絵となったティチアーノの骸骨図（メント・モリ）を実際に見た応挙が、それに返答しようとして描いたものという解釈が示された。それは証明されたというものではないが、キブルツ氏によればほぼ疑い得ないことなのである。②では、丸山眞男の思想そのものよりも、それを巡る論争者の議論がどのような枠組みを前提にしたものであるかが示されていく。その枠組みは多くは外から借りて来られたものである。その結果、そのような論争そのものが問題にしえていないこと、すなわち、実は日本学にとって真に問題であるはずのことが、逆に見事に、ホリウチ氏によって示されていくのである。③ではフランスも巻き込むマンガ・ブームが、あいまいな比較文化論や社会心理学によってではなく、厳密なアンケート調査の結果に基づいて分析されていく。そこで明らかになることの一つは、ブイス氏によれば、マンガファンは必ずしも日本ファンではないということである。逆に言えば、マンガの説得力は必ずしも日本的なものから来ているのではないということである。マンガを世界で通用するものにしてしているのは、日本的なものに隠されている何か日本的ではないもの、ということになる。

こうして、このようなフランス日本学が、国際日本学に課題として提出して

いるのは、翻訳の問題なのである。フランス文化は基本的に翻訳を知らない、あるいは、翻訳に重きを置かない文化であって、翻訳をそれとして積極的課題にすることが少ない文化である。フランス日本学もそうなのだが、ただ国際日本学としては、フランス日本学が提起するこの問題をあくまでも翻訳の問題として捉えていってよいであろう。翻訳は決して一方の言語を他方の言語に完璧に同化はしえない。他方の言語に翻訳された一方の言語には、翻訳されずに残された部分が必ず生じるのである。一方の言語とイコールでない以上、何らかの意味で他方の言語はそこで作られたものである、もしくは、他方の言語は一方の言語を完全に翻訳しえない分、それは創造しているのである。①応挙はテイチャーノを翻訳している。そのことで創造している。②丸山は、そして同じように丸山論争は西洋の哲学・社会学を翻訳している。そうすることで、創造をまだ果たしていないとしても、どの方向で日本思想が創造すべきかを指し示している。③マンガも創造している。だからそれはそれが翻訳している、何か外的契機を有しているはずなのである。

こうして国際日本学はフランス日本学と対話をさらに積み重ねつつ、それを他国・他文化の日本学と、とくに翻訳の問題を通じて比較し統合していくことを今後の課題としよう。

COEテーマタスクフォース②-3

西欧（独・仏）・中国の日本文化研究の総合的研究

王 敏

相互理解としての日中比較文化研究

国際的日本文化研究の現状

日本学研究を国際的視野で俯瞰したとき、日本を対象にした外国人による研究は日本人における研究と相互補完的なものであろう。しかし、多文化競合の中で国家ネーションという枠組みが実在している。それを超越した「越境」人流、物流が世界を変える勢いにあるにもかかわらず、ネーションの存在は頑強である。文化研究も往々にして国家を主体とする価値基準に影響されざるを得ないことが多い。ときには「国益論」と結びつく政治、経済によって、研究成果が見られがちである。安全保障を目的とする政治主導を軸に研究を進化させてきた歴史もあった。一つの分野の学問が完全に独立して成り立つことほど難しいことはない。時代意識と関係を持たずに成立する学問はないかもしれない。人文科学における諸分野の研究は必然的に時代と環境に向き合うことを求められていると考えなければならないのであろう。研究者に課せられた課題と思われる。

国際日本学研究の方法論

法政大学においては国際日本学研究の方法論として「メタサイエンス」を枠組みに据えている。「メタサイエンス」を日本語で表現する場合、「実証的、科学的日本研究」となるかもしれない。しかし、この研究方法が確立されているわけではない。骨組みを共有できる認識の確認に至るまで相当時間がかかると推察している。「メタサイエンス」方法論を具体的に試みる段階において、とりあえずそれに繋がると思われる日中比較文化研究を中心に方法論の模索をしてきた。

相互理解に欠かせない日中比較文化研究

日本では比較文化研究を西洋的価値観による学問として取り入れたのは近代の西洋に遭遇のあと19世紀末であろう。最初にフランスで成立した文学における比較法が日本に入ってきた。中国では1949年の国家再構築以来、社会主義的価値があらゆる分野における基準とされてきた。文化大革命の嵐が過ぎ去った1980年代に初めて相対論が許容され、中国で多元的価値観や理論の伝達が可能になってきた。まだ摸索段階にあることは否めないが、ここ20数年来、改革開放が進んで、固有のネーションという枠から抜け出した研究も見られだした。日中両国におけるこれまでの自画像と他者象を変える研究も現れてきたように思われる。この新しいうねりが、やがて日本研究の新世紀を構築していく強い力になると思われる。日中の間において比較文化研究の導入をめぐる時差にかなり開きがあるものの、今や比較教育学、比較言語学、比較宗教学、比較心理学、比較神話学、比較文法、比較文化などの領域が中国で拡大している。

特に日中間の研究を深めていくのも比較文化の応用が望ましい。なぜならば、相互認識の角度から見つめていくと、日本人も中国人も異文化といえれば一般的に西洋文化を思い浮かべる。西洋文化に出会ったときから、その文化を異文化と見ることを共通して当然視してきた。日中両国とも異文化研究といえれば西洋諸国の文化に焦点を合わせがちである。日本と中国は「同文同種」といわれるように、西洋文明との対比に影響されて、相違を意識するより共通性の認識を持ちがちなのが一般的である。アジア諸国の文化においても同様と見なしている。

ところが、異文化の西洋によるアジアへの攻勢から生じた衝撃に対し日中は対処が分岐した。日本は西洋化を受け入れ近代化に走った。脱亜入欧の日本とは違って、中国は固有秩序の文化圏を堅持しようとした。しかし、日清戦争で日本に敗北して固有文化の遅れの一面を思い知らされ、西洋主導の近代化の必要性に目覚めた。以後、おおむね日中戦争直前まで近代化実現のモデルとして日本に学ぶ姿勢をとり続けた。

戦後も東西冷戦に巻き込まれ、日中の敵対が継続した。1972年に国交正常化したとき、日本は敗戦の荒廃から目覚しい復興を遂げ、すでに先進国入りしていた。中国は文化大革命の混乱期にあり、生産性の低い農業国から脱却できな

いでいた。属する体制の違いのうえに、経済発展期の日本と発展途上の中国の差が歴然であった。

しかし、差は政治・経済・社会でのことであって、お互いの文化についての相違をほとんど意識しないことは不幸な半世紀以上の交流の断絶の後も変わらなかったようである。有史以前から交流を積み重ねてきた日中間特有の「弊害」でもある。同文同種に収斂される日本人の中国観であり、中国人の日本観である。日本人は歴史的に中国から受け入れた漢字や儒教の教養から中国と中国人をよく分かっていると思ひ込み、中国人は発信した中国文明の影響下にある国と見て、日本と日本文化を中国文化の亜流と見なすのである。従来からの中国観、日本観に加わった要素が、教条的な共産主義国家と見る中国観であり、侵略されて悲惨な記憶を重ねる帝国主義国家中心の日本観である。複雑な中国観、日本観の様相を形成している。

相互認識の「ずれ」は大きい。現代の日本人は、儒教の考え方が染み込んだ中国文化の核心と、中国人の思考回路を理解できないでいる。現代中国人は、西洋的教養体系に育成されている日本人でありながら、同時に侘び寂の境地にたどり着いた日本文化の独自性に気付いていない。互いに異文化と認め合う相互理解を進める基本が欠落しているところがあるろうかと思われる。

相互認識の「ずれ」は、社会構造、文化基層、風俗習慣、思考回路、価値基準、行動様式などの各分野で見られている。往々にして「不可解」に映り、ねじれとして相互不理解の障害になっている面もある。これらを打開するには、比較文化という手法がもっと活用されるべきであろう。

比較文化によって、自画像と他者像の両方を浮き彫りにさせ、思考の奥行きと広がりを持たせる。比較を伴った文化の研究と交流が人を謙虚にさせ、相互学習を深化させていく。「国際日本学研究」の確立には相互理解としての日中比較文化研究にもっと関心を持つことが求められていると思われる。

比較文化研究活動の到達点

一、研究視点の確立

①時間的縦軸と空間的横軸を組み合わす視点

いかなる国の文化を研究するにあたって、時代または年代区分という縦軸

の視点でその変化を追いながら、横軸・空間の視点で個々の時代精神に見合う変容をしっかりと見極めていくことを欠かせないということである。いつのどの研究にも共通するスタンスであろう。社会文化領域で時代精神とかわりない研究は考えられない。日本文化研究についても、時代区分、時代精神を研究過程で有機的に捉え、分析して論じる必要があると思われる。日中比較文化研究の方法論も、このような縦軸と横軸との融合体の視点を基礎として位置づけるべきであろう。

特に長い間の鎖国状態から激変した中国を見る場合、このことを強調しすぎることはない。日本との関係で紆余曲折している中国史において日本文化研究もほかの国に比べると特殊な様相を呈している。したがって、現代中国の日本文化研究を分析、研究するにあたっては、特に縦軸と横軸を組み合わせる視点が求められると思う。

例えば、井上靖の『天平の薨』(中央公論社、1957年)をめぐる評価の変化がそれである。日中の国交がまだ回復していない1963年4月に、北京作家出版社から中国訳の『天平之薨』が出版された。翻訳背景には、日中文化交流を進めたい党・政府の意向があった。遣唐使と鑑真に教育宣伝の価値があったからである。しかし、1966年に文化大革命が始まると、『天平の薨』に対する評価は一変した。「封建主義、資本主義、修正主義を代表する大毒草」として発禁処分を受けた。翻訳した楼適夷さんは糾弾された。文化大革命が終結した翌1978年、日中平和友好条約が締結され、『天平の薨』は、「中日友好のシンボル」として復活し、名誉回復された楼さんは新訳に取りかかった。

この例だけでも、中国における日本文化研究が時代精神に翻弄される危険を背負うものと思われる。時間的縦軸の目盛りが変われば、特定の時代精神がふつうの状態に変化してしまう。たとえ近隣国であっても、日本では考えられない環境の中で中国の日本文化研究がされてきたのである。

2004年に中国の日本研究最前線にいる研究者たちの論文集『〈意〉の文化と〈情〉の文化』を筆者の編著で中公叢書の一冊として発行した。その際、数社の書評に取り上げられた。その内、朝日新聞の書評欄では、「編著者が高く評価する、共産党の対日政策史に関する論文も、筆者には退屈きわまりなかった。その背景には……編著者のいう〈日本の研究者からは想像しがたい制約と環境〉

が、編著者を含む日本研究者たちを取り囲んでいるのであろう」とある。

この書評では、まず中国という空間的横軸にある「背景」が日本と違うことを指摘した。異なる背景の産物・論文への評価視点が大きく二つに分かれている。「日本の背景」と「中国的背景」に沿う分析になるのであろう。「中国的背景」による視点から見れば、中国国内にある同類の論文と比べる場合、その論文が「高く評価する」理由があるとする。しかし、「日本の背景」に限定されている時間的縦軸に刻まれている価値観から見たとき、「退屈きわまりなかった」とされてしまう。ここには、同じ対象に向かっていても、同じ横軸にある空間の性質が違くと、縦軸を絡ませている目盛りの時代精神による許容の度合いが異なるものとなる。日中が同じ横軸に並列されている隣国であるが、国柄も国情も不同である。相互認識の「ずれ」があっても当然である。

たとえ目盛りの刻みが同様とはいえ、目指す時代精神がそれぞれ違くと、同時発生の事件の性格も違くとされている。その場合、「日本的」と「中国的」、二つの視点を等身大に把握できるのが望ましい。それは難しい「わざ」であろう。二通りの知識構造と総合的見方を持ち合わせる事が求められているからである。

②日中「異文化」という視点

日中両国にとっては「異文化」というとき一般的には西洋文化を指している。異文化研究といえば西洋諸国の文化に焦点を合わせがちである。比較文化や異文化コミュニケーション研究における顕著な実績は、ほとんどが対欧米に偏っている。西洋文化に出会ったときから異文化と見るのを共通して当然視してきた結果である。「同文同種」のしこりが普遍化しているアジア諸国との間にも、日中間ほどでないにしても共通文化という認識を持ちがちである。

具体的に日本における普遍的な中国観に触れてみたい。中国を基本的に「後進国」とする見方が依然として根強いことである。この伝統的な中国観をベースに欧米文化を上乗せした構造として、最近の変貌を捉えていると思われる見方がまだ多い。中国の様変わりをもっと構造的な変貌と見たい。かつての中華思想の鎖から、教条主義的な社会主義の殻から脱却する精神文化の変革が起こっていると見るべきであろう。

欧米に学べば「先進国」と「後進国」という二分法になりがちである。中国はこの二分法にあてはまらない。中国を一つの色に染めて先入観的に見ることは危険なことではない。多様な要素を複雑に絡ませて、歴史的な試みをしている国と見てほしい。異文化の視点で眺望するなら、激動の中国が少しずつ見えてくるように思われる。新しい中国観の確立を望みたい。

一方、中国は古有の伝統的漢文教養体系とは違う世界に変わってきている。日本観も日本研究もグローバル化にもまれて新しい視点で取り組まれたしているとはいえ、現代中国という独自の原風景から再出発した日本観と日本研究として改めて把握することが必要であろう。日中間の摩擦を「異文化」という視角による分析を試みている。

2003年10月29日、中国西安の西北大学での文化祭で、日本人留学生たちが演じた卑猥な寸劇を、中国人学生が「中国を侮辱するものだ」として怒り、抗議行動が沸きあがった。翌日から一般市民も巻き込んだデモ行進や集会が繰り返され、やがて日本料理店が襲われる大騒動にまで広がった。

日本では、はだか祭りが普遍的である。国技である大相撲をはじめとして、締め込み、下帯姿など半裸体で演ずるはだか祭りが実に多い。JTBから発行されている日本各地の「行事カレンダー」から拾い上げても、その代表的なはだか祭りは30を超えている。

祭りとは、降臨した神霊に人間たちが心から奉仕する行いであって、神と人との交流の場といえる。それらすべてが神事であるから、当事者たちは真摯で一途に参加するし、それを見物するほうも感情移入しながら見守るのである。その姿に対して奇異感を抱く日本人はいないに違いない。

神代の昔、天照大御神が隠れた天の岩屋戸の前で、八百万の神が見守る中、天宇受売命がはだかで舞ったという神話は、『古事記』の中でもっとも有名なくだりである。はだか舞が古代から日本人に浸透していた証かもしれない。

幕末の1853年、日本を揺るがせた黒船の来航、そのペリー艦隊に随行した中国人通訳の羅森が、開国当時の日本見聞記を香港の月刊誌『遐邇貫珍』に発表した（羅森の見聞記「羅森日記」の日本語訳は、岡田章雄『外国人の見た日本第2巻』（筑摩書房、昭和36年刊）に詳しい）。羅森は同じアジア人として、隣国の異文化に触れて驚いている。

「雇女の中には、肌をあらわに出して働いている者が少なくない。公衆の面前で、男は太腿を出してはばからない。女が春画を見ても、怪しまれない。男女が混浴して平気な銭湯というものさえある」。性風俗について、男女ともあつけらんとしているのには、特にびっくりしたのである。江戸末期の日本のおおらかな男女の関係やはだか姿を見て、目を丸くしたであろうことは想像に難くない。

中国においては、はだか祭りにあたる事例は皆無である。古来、祭典にも儒教倫理による礼が重視され、社会全体の実践的規範となり、衣服調度の模様や彩色などによって、物事の区別や等級を明らかにするために、厳かに行われるようになった。その様子は、三礼といわれる『礼記』『周記』『儀礼』の儒教の経典に示されている。

祭典は倫理を重視した政治の補完的な役割を担っていたから、神聖かつ権威性を示す目的で厳かにとり行われていた。まさに「襟を正す」の言葉どおり、姿勢や衣服の乱れを整えきちんとすることを、まず第一に要求された。禁欲的で、服装なども厳しく規制されたこのような社会常識の中では、はだか祭りなど到底考えられないことであった。

1949年に中国が誕生したことによって、社会と国民に対して因習を捨てて社会主義理念にふさわしいモラルが要求された。男女は平等であっても道德主義は強化され、猥褻な言動は批判の対象になった。従来から公的な場所や会合などで性の表現を慎んできたが、新中国では輪をかけて公共の場から性の姿がほとんど消えてしまった。

1966年からの10年間は文化大革命によって、中国の近現代史における閉ざされた時代であった。文化的にも鎖国状態となり、伝統的な祭りも迷信と断じられご法度となり、禁書令も実施された。ブルジョア的としてヌードをはじめ性的なものはすべて一掃され、性的な関心を持つことさえ否定された。祭りはほとんど行われることはなかった。

この歪められた悲劇的な時代がその後も尾を引いていた。たとえば、1980年、上海バレエ学校が湖南省で舞台演出をしたときのこと、男性ダンサーの白いタイツに観客が驚いた。バレエ衣裳では、ごくふつうの姿であるが、中国の一般大衆にとっては「裸に近い」下着を連想して卑猥に映ったのである。じっと怒

りを抑えていた中国人が、幕が閉じるやいなや立ち上がり、大声を上げた。「恥知らずめ。そんな姿をさらすとは。これがバレエというものなら中国人が受け入れられるものではない」

1987年から改革開放政策がとられると、中国には多様なものが入り、人々の考え方には大きな変化が現れる。ヌード写真展が開催されると、長蛇の行列ができる賑わいであった。日中の浮世絵（春画、あぶな絵）を紹介しながら、性文化の重要性を解説した『浮世と春夢——中国と日本の性文化比較』（中国友誼出版公司・2005年）というカラー印刷本が出版された。

さて、西安の西北大学で起こった「寸劇事件」については日中どちらも、外国人の異文化との付き合いに慣れていないという背景が見え隠れしているように思われる。中国は短期間で価値観が目まぐるしく変わっている中で、異なる文化との成熟した付き合いへの過程で起きた「笑い話」の一つとして、事件を回顧できる日の到来を待ちたいと思う。

日本における中国に関する教育を見れば、中国語のほか政治・経済・社会や文学・芸術まで内容の充実には著しいものがある。表層の常識にとどまらず、深層に見え隠れしている価値観の違い、生活文化の違いにもっと重点を置くようにすべきであろう。特に中国留学生や就職希望者、滞在者に対しては欠かせない要素として認識されなければならないと考えている。

多角的に隣国を俯瞰しなければ実相を見失う。日中とも戦後、古来共有できた漢文世界における教養体系から大きく変容してきた。中国もここ20数年、西洋に学び深化しているし、従来のあるかたからの脱皮が著しい。

現代の日本と中国はいずれも独自の原風景から再出発した。固有の相互認識を修正して新時代に見合う相互理解を深めていくことが必要であろう。文化の違いの一例として西安寸劇事件を日中双方向の教訓とする姿勢がなければならない。

寸劇事件はあくまで一現象にすぎないと見てもよからう。その深層には、異なる文化の基層が敷かれているからである。これまで日中を異文化として見直す比較研究の意義が見過ごされていたところがなくもなからう。もしくは異文化の見方を過小評価してきたように思われる。日中両国には、同じアジア文化の一員であるから両国の文化の違いに留意しようとしなない人が多いのではない

か。重ねていうが、日中は互いの現代文化に対し古代と同格の「同文同種」の先入観を排除しなければならない。中国には、同じ儒教文化圏として日本を見る風土があり、日本文化は中国文化の亜流と見なす長い伝統がぬぐえないでいる。日本が世界のどの国よりも中国古典の教養を持っていると自認している。お互いに知っているつもりで付き合ってきた。それはあくまでも表層にとどまる相互認識、相互理解である。

異文化としての日中比較の視点が今、求められている。日中が相互の文化の異質性に気付き、比較文化の研究を進めることが急務である。

③相互認識の「ずれ」を認め合う視点

日本と中国の間には昔から「同文同種」という思いが強くある。ときには相互理解を助けるが、分かっているという思いが先入観になって往々にして誤解のもとにもなる。これらのことを十分に認識したうえで、理解への準備を整え、慎重に発信していくポリシーが揃わなければ、正しく受信されにくいし、逆効果にも成りかねない。そのための心構えは、文献、資料によるだけでは不十分である。日中両国という研究現場での生活体験を基にした立体的研究が優先されなければならない。相互認識のずれを気付かせる生の体験ほど貴重なデータはない。

同じ漢字を使う日中間では、同じ漢字が同じ意味を持つと誤解されることがよくある。「謝罪」についての見方もその一例である。「謝罪」に触れられた拙文は法政大学国際日本学研究所編『国際日本学の構築に向けて』に収録されている。「中国における日本研究の研究を中心に－国際日本学研究方法論試論」という題名である。ともあれ、日中間で歴史的な経緯の中で違う内容に変容したことを考えないで、お互いの認識で相手の漢字を理解するからである。相互の違いに気付き、文化の違いに通ずるものと認識することが自然であるとの「常識」を持つことが大事である。現実問題としても日中両国の間にわだかまる未解決の思想課題や政治的要素に引きずられ、相互の文化に対して異質性を冷静に見る視線が欠如している。

相互認識の「ずれ」というテーマ研究が放置されてきたからであろう。同文同種から生まれてきた「知っているつもり」という先入観の排除に立って、よ

うやく相互理解の必要性が認識される。相互認識の「ずれ」を認め合うことのないところには、しこりや誤解が生じてくる。

相互認識の「ずれ」を認め合う視点は相互理解、善隣友好のもとであり、日中比較文化研究を進めて行く基礎研究である。

④日本の文化力を再認識させる視点

2004年9月、ハーバード大学で「イグ・ノーベル賞」の平和賞の受賞式が行われた。受賞者は兵庫県西宮市在住の井上大佑氏で、受賞理由が「カラオケを発明し、人々が互いに寛容になる新しい手段を提供した」からという。ユーモア溢れる知的受賞理由のように思う。

カラオケはいまや各国に普及し、日本文化を代表している。受賞式から2週間後に、中国社会科学院日本研究所主催の国際シンポジウム「世界の中の日本文化——自国文化との摩擦と融合」が北京で開かれた。カラオケ効果がまじめな研究テーマになっていることを知る機会になった。日本のほか韓国やアメリカ、フランス、ロシア、インド、ベトナムなど8カ国から日本文化研究のリーダーや専門家が集まり、日本語による討論を重ねた。その中の一つのテーマに、カラオケに注目して大衆文化が、自国の精神文化やグローバリゼーション化に多大な影響を与えた論点が含まれていた。これはシンポジウム開催の意図と一致したテーマでもあった。

日本の生活文化、大衆文化が発信されてきた結果、各国で多様な「日本ブーム」を引き起こしていることを教えている。中国語圏では、市民権を得た「村上子どもたち」や「ハーリー（哈日）族」、英語圏でささやかれる「クールジャパン」という言葉が象徴的である。さらに日本ブームを受けて、異文化としての日本理解、日本研究が、日本以外の国々で着実に進んでいる。

このような現状を見渡したとき、次の二点が指摘できるであろう。

一点目は、各国で日本の生活と大衆文化が再認識されて、日本の文化力（ソフトパワー）を見直す機会をもたらしているのではないかと、ということである。

二点目は、現代史における日本の文化的役割が無視できなくなっていると考ええる。とりわけ、政治の波風の立つことの多い日中間やアジアの国々との間では、対話可能の原風景として日本の生活と大衆文化が共有できる方向に進んで

いるのではないかと思われる。

日本文化が世界の文化の中で特殊な性格があるとしても、平和発信として積極的に働きかけていくなれば共有の範囲を広げられるであろう。カラオケの効用がそれを教えている。日本は受動的になるべきではない。「ドラえもん」（機器猫）の知名度は各国で日本の首相をはるかに超えている。回転寿司が全世界で回っている。日本の生活文化、大衆文化は世界の影響を受けているが、同時に世界に向けて発信している。

これに比例して、日本の生活文化と大衆文化研究が各国で取り組まれている。日本人は自分の国を見つめることが好きな民族とされるが、日本論、日本人論の参考になることが多いはずである。「ところ変われば品変わる」と冷ややかにながめるのではなく、積極的に他国の日本研究を対象とする研究が真剣に取り組まれてよいと思える。それは日本の研究者にとって参考になり、貴重な視点や資料が得られるかもしれない。このような認識で研究のプロセスを循環させるなら、国際的日本学研究にも寄与するのではなかろうか。

⑤日中の文化関係を考える視点

日中交流は2千年を超える。日米の交流が1853年の黒船来航以来1世紀半に過ぎないのと比べて、日本では中国の影響が暮らしにも隅々まで、草の根の日本文化に染み込んでいる。中国においては日本像が古くからあることはすでに触れた。概して平和な関係の時期が長いが、幾たびか不幸な時期もあり、日本像を複雑にしている。邪馬台国の時代から遣唐使にかけ、もっとも友好的であった時代から一転した倭寇侵攻や日中戦争の後遺症は簡単に癒えるものではない。1972年日中国交正常化後は日本製品と大衆文化の浸透・普及などによって、新たな日本像が生まれている。が、A級戦犯が祀られている靖国神社の参拝問題や歴史教科書問題などによって悪役の日本像が一向に消えない。いったんもつれた毛糸を解きほどくのは簡単ではない。現在の日中関係及び国民感情は、まるで絡み合った毛糸と同じ状況にある。

日中関係を友好的な状態に戻したい。このことを考えるとき、政治中心の対立・相違に目を向けるのではなく、共有している部分を土壌に対話を促進することではないか、と思われる。両国を繋ぐもっとも有効な土壌といえば文化で

あろう。古代には日中韓の間に白村江の戦いが663年に起こったにもかかわらず、遣唐使の派遣と受け入れは中断していなかった。それは文化使節団、平和使節団であり、経済的な領土的な野望がなかったからであろう。後に倭寇の侵犯が原因で日中関係が冷え込んでいた時期にも、中国に渡った東大寺僧奄然（ちょうねん、938-1016）が時の皇帝と対話したことが『宋史・日本伝』に実録されている。悪い日本のイメージばかりでなかったことが分かる。

2004年秋のこと、東京・上野の森では、中国国宝展と始皇帝兵馬俑展の二つの中国歴史遺産関係の展覧会が開催され、多くの日本人が鑑賞した。夏のサッカーアジア杯での「反日噴出」騒ぎが日本で大々的に報道され、中国への反発が覚めやらぬ状況であったが、どちらの展覧会も最終日は貴重な中国文化の威光を見逃すまいとする人波で埋まったという。中国映画も話題を集め、張芸謀監督作品の「ヒーロー」や「ラバーズ」はヒットした。一方、中国でも同年6月に、1973年以来の開催となった日本の大相撲の北京、上海興行はどちらも満員であった。日中ともに、文化の相互交流は熱かった。

文化土壌が政経問題、国際関係問題、外交問題における分析・判断の基礎にあたるが、その差異によって相互の認識と判断基準に無意識の影響をもたらしているという認識が必要である。したがって、文化的交流による相互理解を進めれば、政治、国際関係、外交の分野でも反目が減っていき、前向き方向に向かわせる連動的な効果が得られよう。要は、政治経済、国際関係、外交及び国民感情が文化の補完でその構築が一層堅実になると考えている。

文化交流といっても、ミッションの交流という狭いことを意味しない。先にも触れたように、日本には中国文化像があり、中国には日本文化像がある。生活に染み込んだ相互の文化観がある。民衆レベルの文化観における交流を進めることが大事だと思える。生活者中心の文化関係の再確認が必要であろう。一衣帯水の隣国として文化交流を続けてきた歴史があるからこそ、ミッションに関心が向くのである。

文化関係に重心を移して見れば、長い伝統がある両国は相互学習しながら独自の文化を育んできた。価値観、宗教、文学、思想などに異なる発展をしてきた。日中関係の基礎として文化関係への注意を払えば、相互に受信した知恵に感謝し合い、異なる異質性を発見し、文化の違いを認め合うようになるはずで

ある。文化交流の促進が不可欠なはずである。等身大の対話が常態になれば、政治的な反目も少なくなるであろう。両国研究者の共同作業によって文化関係の研究を進めることが急務であると思う理由である。

とりわけ、政治の波風の立つことの多い日中間やアジアの国々の間では、対話を可能にする原風景としても共通認識の構築が迫られている。この研究の成果が「共同知」として共有できれば両国の交流現場に活用できるであろう。望まれる日本文化の発信も合わせて進むものと期待できる。

この世界を見渡して、日中ほど歴史的に長く交流してきた両国関係はないと思われるにもかかわらず、現代史における反目、いがみ合いはどうしたことか。ねじれ現象を放置しては解消しない。両国を比較文化の手法による「異文化」という視点で捉え直す文化関係の確認、分析、研究が急務であると考えており、アジアの国々の間にも共通する視点であると思われる。

二、日中比較文化研究におけるテキスト模索の進展

①方法論としての『武士道』

新渡戸稲造の『武士道』は英語で書かれて1899年に出版されて以来、1905年の改訂版を経て多くの国の言語に翻訳されている。中国では1993年に張俊彦が、1972年の岩波文庫版を翻訳して商務印書館から発刊された。増刷が相次ぎ2005年6月には8刷になった。

『武士道』の本は上記以外にも3種の翻訳版が知られている。

- 1、傳松潔訳（企業管理出版社、2004年1月、発行部数15000部）。
- 2、陳高華訳（郡言出版社、2006年5月、発行部数不明。題名は訳者の潤色が反映されて『武士道 日本民族精神の哲学解釈』となっている）。
- 3、宋建新訳（山東画報出版社、2006年6月、発行部数1万部）。

企業管理出版社版は、『武士道——日本に最も深く影響を与える精神文化』と題し、その表紙や裏表紙には、「世界的な古典のベストセラー」、「日本が経済強国であることの最も信頼すべき解釈」、「武士道文化の最も権威ある読本」などのキャッチコピーが見られるほか、扉には「現在日本で発行されている5000円紙幣には、新渡戸稲造の肖像が印刷されている」、「ドイツ語、イタリア語、フランス語、スペイン語に翻訳され、世界各国で武士道文化の經典として

読まれている」と記されている。

なぜ『武士道』が多くの人に読まれているのかについては、複数の見方が考えられる。新渡戸の表現手法・比較文化研究の手法に注目した愛読理由を挙げることができる（比較事項計97件。データ省略）。

新渡戸はこの著作の読者として外国人を想定した。特に英語圏の人々を念頭に置いた。生存環境も教養のカテゴリーも異なる「異人」との対話を心がけたに違いない。日本文化をまったく知らない、体験もしていない異文化の人々にどう理解してもらうか。難題であったに違いない。脳裏に読者を目の前に立たせて反応を想像しながら、論点の一つ一つを展開する方法をとったかもしれない。

実際、『武士道』の序文によっても新渡戸と読者の相互関係が窺われる。新渡戸が『武士道』を書くことになった動機について序文で告白している。学校で宗教教育というものがないことに、西洋人が驚き「いったいどのようにして子孫に道德教育を授けるのですか」と詰問されたからであるという。西洋人にとって、宗教とはあらゆる生活の基準であって、ふつうキリスト教が内なる絶対的な価値を持っている。中国人における儒教と同じ位置を占めている。また、日常生活においてもアメリカ人の夫人をはじめ西洋の知人、友人に質問されたことが多いのも、執筆に至る動機のようなのである。

新渡戸は、日本文化の対欧米における最初の説明者という位置づけが可能である。新渡戸は西欧人と知的対話をした明治の先進的日本人の一人である。西欧人は新渡戸を通して日本に関心を抱き、日本を知りたがったに違いない。西欧人の好奇心が新渡戸に真剣に考えさせ答案を書くように仕向けたのである。答案は書き出す前から西欧と日本の比較の脈絡に置かれていた。いうまでもなく、知的対話に刺激されて著作に向かうかどうかは性格と意欲もあるが、使命感ほど動機としてふさわしいものはない。日本文化を知り尽くした信服と異文化との差異に怖気ない頑固さも欠かせない。執筆の全過程に相互理解としてのケーススタディーを必然としたはずである。したがって、『武士道』は比較を伴った文化交流の結晶ともいえよう。

②方法論としての『菊と刀』

日本の精神文化を外国に発信するために、新渡戸稲造は『武士道』を、岡倉天心は『茶の本』を、九鬼周造は『「いき」の構造』を書いた。日本人の思考パターンが西洋に紹介された意義は大きいといわねばならない。彼らに表現の知恵を学ぶものが多い。ところで、逆の例もある。外国人でありながら日本文化研究の成果を国内外に発信するものとして『菊と刀』を挙げたい。

『菊と刀』はアメリカの文化人類学者ルース・ベネディクトが太平洋戦争が終わった翌1946年に完成した日本論である。The Riverside Press Boston出版の英語版に基づき、1948年に日本語版ができた。中国語訳は1987年に浙江人民出版社から発行されたのが最初である。その後、日本への関心が高まる1990年に、呂万和・熊達雲・王智新三氏の共訳で商務印書館版からも出版され、2005年6月には第14刷に達し発行部数10数万部を記録した。

このほかに中国語訳『菊と刀』は4種が出版されている。

- ①孫志民氏他の翻訳が九州出版社より2005年1月に4万部を発行した。
- ②唐曉鵬、王南両氏の共訳が華文出版社より2005年2月に3万部を発行した。
- ③廖源氏の訳が中国社会出版社より2005年2月に1万部を発行した。
- ④線装書局から2006年1月に出版の『日本四書』の1冊に収まった。『菊と刀』のほか『武士道』、『日本論』（戴季陶）、『日本人』（蔣百里）。副題には「日本民族の特性を洞察する4つの文体」とある。

『読売新聞』2006年1月1日付の記事「日本人とは何？ 中国で『菊と刀』ベストセラーに」には商務印書館版『菊と刀』の発行部数は、「計14刷累計12万部」と報じられている。また、発行以来10数年間増刷を重ねてきた商務印書館版でも2005年の1年間だけで7万部の増刷に達したという。

日本では、『武士道』と『菊と刀』の日本文化論対しての是非をめぐって議論が多様に交錯している。しかし、議論の内容への賛否は別にして、『武士道』と『菊と刀』の共通点は日本文化について比較文化という手法によって論理的に整理して展開しているということである。

日本においては「内向きの視点」による細分化の日本文化研究は多いが、外国人と共有する普遍的な視点による研究はまだ少ない。国際的視野による日本文化研究に参画する意欲が欠ける結果、内外の研究を統合する体系的顕著な成

果が乏しいといわざるを得ない。これが、本格的な国際日本学研究の展開が遅れている背景でもあろう。

国際日本学研究を進めていくには、他国の研究を他山の石として取り入れ、自国の文化が多様性を持つ混成文化であるとの認識が必須である。このような認識を持ったとき初めて、日本文化を国際的に発信することが可能になろう。『武士道』と『菊と刀』に学ぶところが多いと思われる。

③方法論としての宮沢賢治

宮沢賢治の人生とその作品は、外国人に以下のことを教えていると思われる。

1 > 日本文化の普遍性

雨ニモマケズ
 風ニモマケズ……
 ……イツモシヅカニワラツテキル

賢治の作品にはこの詩のように自己完成を求め、自分に納得をもたらす笑いが多く、それは悟りに通じる深い意味を含んだ笑いである。笑い声にならない笑いである。「よだかの星」では、「みにくい鳥」よだかが殺し合いを逃れて天上へ高く飛んでいく。体が燃えだしたと知ったときに「たしかに少しわらって居りました」。「虔十公園林」では、「ミンナニデクノボートヨバレ ホメラレモセズ クニモサレズ」、虔十が周囲の無理解にも黙々と自分の意思を通して植樹を続けたとき、笑いが見られる。

賢治の描く笑いは、汚れたこの世界を生きなければならない衆生が心を救われたと感じたときにこぼれる表情かもしれない。賢治は「われらの祖先乃至はわれらに到るまで すべての信仰や徳性は ただ誤解から生じたときへ見えしかも科学はいまだに暗く」（「生徒諸君に寄せる」）と、近代文明の受容に伴うマイナス付加価値の蔓延を見抜いた。

賢治は、人間も生きとし生ける命のほんの一部であり、自然界の一存在として捉えていない。人間だけの世界に閉じこもったのではない。人間はこの世界

を、すべての動物と、すべての草木と共有していることを信じた。あらゆるものが共生していることを疑わず、この信念を代表作『春と修羅』の「序」の冒頭に記した。

わたくしといふ現象は
仮定された有機交流電燈の
ひとつの青い照明です

(『宮沢賢治全集』第2巻(筑摩書房・昭和51年2刷))

万物を平等の目で俯瞰したとき初めて、相互に「有機」関連の因果関係にあることに気が付く。青い照明の明滅の交代循環図が見えてくる。賢治は謙虚であった。「すべてがわたくしの中のみ人であるやうに みんなのおのおのの中のすべてですから」(同上)。「農民芸術概論綱要」では「世界ぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」といった。あらゆるものがみな相互に関係しあっていると思ったからだ。人間同士の争いも人間と自然との対立も愚かと道破したのである。

自然との融合に通じる世界観である。これも日本文化の深層を映し出す日本の風土から学び取ったものであろう。しかし、地域に根ざしたローカル文化への愛着が賢治の思考を深めはすれども、内向きに閉塞させ矮小化させることはなかった。自然に学ぶことを習性にした賢治は自然に対して謙虚さを失わず、「人と地球によるべき形を暗示せよ」(「生徒諸君に寄せる」)と説いた。自然豊かな郷土を愛して、岩手を「イーハトーヴ」と名づけた。郷土を理想郷にして世界全体に広げる夢を託したように思われる。

自然と融合した賢治の童話はどれもこれも、あらゆる生き物の対話で満ちている。「雪渡り」は狐と人間の子どもたちとの間で、「鹿踊りのはじまり」は鹿たちと人間との成功例だ。異文化交流の見事なシンフォニーを奏でていると見ることができる。敏感な賢治は21世紀のグローバル化の進展を想像していたのだろうか。100編以上に達する童話は共生モデルとして発信されているのかもしれない。

「烏の北斗七星」では、烏の大尉に平和の願望が託されている。「どうか憎

むことのできない敵を殺さないでい、やうに早くこの世界がなりますやうに、そのためならばわたくしのからだなどは、何べん引き裂かれてもかまひません」。

仲良く共生することを混乱させる制度や仕組みがなんと多いことか。賢治は「どんぐりと山猫」に描いた、「一番偉い」をめぐる争うどんぐりに、一郎少年が人為作成の世俗価値をすべて否定して、自然無為の原点に基づく判決を下した。「いちばんばかで、めちゃくちゃで、まるでなつてゐないやうなのが、いちばんえらい」というのだ。

おそらく賢治ほど、子どもから大人まで年齢を超えて、文化の違いを超えて、受け入れられる日本の作家はいない。普遍的な世界観がつねに描かれているからだ。同時に、賢治ほど日本文化の国際化の可能なことを示した作家はいない。自然融合という普遍的な価値が日本人のアイデンティティとして、わかりやすく描かれているからである。日本文化の発信力が世界から問われている今、賢治に謙虚に学ぶことが必要ではなからうか。

2 > 日本文化の混合性

青木保氏が日本文化の特徴を「混成文化」として論じている（『異文化理解』岩波新書・2001年ほか）。そのありかたについて、おそらく日常的には意識されていないかもしれない。実は宮沢賢治の作品の世界がまさしく「混成文化」の宝庫なのである。西洋への受容を別論にさせていただくが、中国に関する例が実に多い。

申年生まれ賢治は幼少のときから『西遊記』を愛読した。故郷の「イーハトーヴ」の岩手県は北緯39～40度の位置で、タクラマカン砂漠の東の入り口だった「楼蘭」などとは同緯度である。これは偶然の一致にすぎないが、世界地図を見たときに気付くこの一致によって『西遊記』の舞台でもある西域幻想へ、賢治を一層駆り立てたと思われる。憑かれたように賢治は、精神の宿を求めて、作品の中で仏教の教え、聖地及び求道への信念を「西」「西天」と象徴させ、それに向かって心象の世界で必死に歩き続けた。歩くことにより、法華文学創作ならびに『西遊記』・西天取经という心象の旅を完成させようとしたかのようである。これはきわめて孤独な行為である。

8歳下の弟・宮沢清六氏によると、賢治の一生をながめて、次のような回顧文がある。「全く、幼い頃から筆者の見た兄は、特に中学生のころと晩年のころは表面陽気に見えながらも、実は何ともいえないほど哀しいものを内に持っていたと思うのである。父がときどき『賢治には前世に永い間、諸国をたった一人で巡礼して歩いた宿習があって、小さいときから大人になるまでどうしてもその癖がとれなかったものだ』としみじみ話したものだが、たしかにそのように見えるところがあった」（宮沢清六『兄のトランク』筑摩書房・1987年9月）

うつむき、瞑想に耽る賢治の姿が浮かんでくるような清六氏の回想である。しかし、賢治は遺言で明らかにしたように「全生涯の仕事」と認識した以上、歩くことを止めようとしな。病を背負い、時間との競走を強いられたかのように前進し続けたのである。

わたくしはでこぼこ凍つたみちをふみ

このでこぼこの雪をふみ

向ふの縮れた亜鉛の雲へ

陰気な郵便脚夫のやうに

（またアラツディン 洋燈とり）

急がなければならないのか

（「屈折率」『春と修羅』）

賢治はこの詩の「郵便脚夫」に託したように、決して形而上にとどまる求道者ではなかった。玄奘と同様に寂しくも強靱に一人で山野を歩く賢治の心が偲ばれる。そして古代の農業技師であった神農に惹かれたように、農の哲学を実践もした。日々、賢治は反省・告白を怠らず、自らを「修羅」と称した。時代閉塞から逃げず、時代の処方箋を創出しようと自己格闘したのである。このため、儒教・道教の世界でも探求を積んだ。賢治は中国古典にも触れ、刺激を受け続けた。

賢治が自ら名づけた「心象スケッチ」とは、他の作品から摘み取ってきた星々が繋がって形づくった星座である。中国古典は賢治にとって、ヒントの生まれる輝く星空であった。明治・大正期の日本は中国古典に関する教養が必須

であったが、賢治はより多く知り、より深く考える「中国通」であった。それは読書を大切にしていたからであろう。

『北守将軍と三人兄弟の医者』は『唐詩選』など中国古典に拠ったある種の借景作品と思われる。中国古典に刺激された斬新な詩的再生であった。中国古典の海を泳ぎながら、エキスを汲み取り、作品に投射する技術は、賢治の独壇場である。作品になったときは、もはや中国古典の跡形は見えなくなっているのである。こうした賢治の高度な借景技法こそ、詩心から生まれた結晶ともいふべき心象スケッチの真髄であろう。

西域を舞台にした『北守将軍と三人兄弟の医者』という作品に象徴的に見られるように、賢治は「西」への追体験を求め続けた。同時に、日中戦争への道を歩んでいた当時の時代の空気にあって、賢治は「北守将軍」の生き様に平和を願うメッセージを委ねた。現実を透視して、時代に敏感な詩心でもって描いたと推察が可能である。賢治の国際性には無窮の広がりを感じられてならない。

3 > 日本文化の特殊性

中国人にとって、日本文化を根っこから理解するのは難しいところがあるが、宮沢賢治を例にして考えることができる。賢治の作品は国や民族を超えたコスモポリタン型文学としてよく知られるが、作品を理解するうえで一般の中国人の感覚からは不可解に思うところがある。

『烏の北斗七星』という作品がある。これは烏と山鳥の戦いを展開した戦争物語である。主人公の烏が敵の山鳥と戦う前の日に殺生することになるため苦しみ、何度も祈った。「どうか憎むことのできない敵を殺さないでいように早くこの世界がなりますように、そのためならば、わたくしのからだなどは、何べん引き裂かれてもかまいません」。山鳥を敵としたのになぜ、征伐するのを躊躇してしまうのか。そして殺した山鳥をなぜ、涙を流して丁重に葬ったのか……。いずれの場面も、正邪の変らぬ区別をはっきりさせなければ気がすまない中国人のごく一般的な価値観からは、烏の悩み自体が不自然に映る。これが中国人の大方の素直な印象である。この問題について、多くの中国人研究者が頭を抱えている。

賢治への不可解な疑問を潜在させたまま、筆者は1980年代以来、日本社会に

永住している。日本社会という研究室で日本について勉強してきた。その中で、ようやく鳥の心境が理解できるようになった。それは日本人に独特な死生観があるからではないか。日本人に形成された思考や慣習の中に外国人には見えにくいものがあると気付いた。

筆者の家の近くに「筆塚」がある。日本ではこのような供養塚が各地にある。ウナギを食べながら後日「鰻供養」を執り行っている。松島の瑞巖寺にある鰻塚が「鰻供養」の名所でもある。大阪在住の学生に住まい周辺の供養塚について調べてもらったところ、20カ所ぐらい見つけたという。

これらのことと宮沢賢治の作品をある価値観から見れば、「死の美学」という日本文化全体に通じる特徴があると思う。死を禊の行為と見なしたり、ときには神聖視したり、美化したりしている。この死生観はおそらく、仏教だけでなく神道、それに武士道の三つが醸成しあっているのであろう。賢治の作品はこういう日本の死生観を自然な形で物語っている。であるから、その作品は国境を超えた響きを届けながら、よくよく理解を深めれば、こうした『鳥の北斗七星』のように、日本固有の死生観ないしは日本的な思考を同時に内包していることに気付かせてくれたのである。

まだまだ未熟さを自覚しているが、日中比較文化の研究者として、異質な死生観への認識に到達するのに、10数年かかった。日本のことを知らない外国人にはもっとかかっても不思議はない。特に半世紀前の戦争の被害地域である近隣諸国には、日本に対してある種の感情的な抵抗感がまだ根強い。彼らを対象に文化の発信をしていくことが同時にどれほど抵抗を受けるか、予想以上の困難を伴うのが偽らざる実情なのである。

この対照的な差異を知ることが大切なことはいうまでもない。賢治作品が日本理解のための簡便な教科書的な意味を持っていると思われる。

4 > 平和発信としてのテキスト

日本の作家群の中で、コスモス型とローカル型の共存を合わせ持つ賢治は貴重である。賢治作品を貫く日本的なものの発見は、筆者にとっては、賢治文学が新鮮に映り、日中異文化研究への切り口になった。賢治はもっとも日本古来の精神性に支えられているストーリーを展開させて、死生観のような日本文化

の基層に見え隠れしている裏打ちがある。賢治を研究することは日本文化と日本人を理解させる標識になる。こういう賢治研究の意義の認識は、あくまでも個人的発見であるが、外国人へ日本文化・日本文学を提供するときの選択眼として参考になるかもしれない。

一般的に外国人研究者が日本独特の文化の深層に気付くことは、よほどの機会に恵まれない限りなかなか難しい。おそらく、自国の文化の価値観と既成概念の殻から脱することがまず必要であり、同時に日本の文化土壤に浸る長い期間を経た後ようやく日本的視点に気付くからであろう。そのとき初めて、日本文化を等身大に理解することができるようになるのであろう。

日本理解の一助にもなる性格が賢治研究には内包されていることは、賢治研究が、日本からアジアへの文化発信の一つにもなると思われる。同時に賢治研究は、異文化の風土に育成された者に既成概念の枠からできるだけ離脱を目指すことによって、日本文化への理解が深まっていくことを示唆してくれるのである。このように意識することができるようになったとき、初めて本格的な日本文化研究に取り込むことができるようになろう。

三、比較文化研究手法による日本文化研究の進化を

①古き文化基層に和魂漢才の知恵

日本古代史のエポック、645年の大化の改新は、学術・宗教から経済・政治まであらゆる面で中国化のきっかけになった。日本は中国を見習い、留学生、留学僧が当時の世界帝国・唐に渡った。遣唐使は630年の最初の派遣から894年に菅原道真の建白によって中止になるまで、10数回にのぼる。1回に4隻、約600人が渡唐した。荒波と風雨にもてあそばれて、無事に往復できたのは1、2回しかない。おそらく4割が海の藻屑に消えたとされる。命を賭して、純然たる大規模な文化使節の往来は世界史でも稀有な例である。

しかし、外来の先進文化に対しては、受容と排斥、学習と創造、折衷と反発など向き合うベクトルが引き合うものである。時代精神とその当時の国際関係とも無縁ではない。しかし主役はすべて人である。抽象的な文化だけが生成・変化しているのではない。時代精神に参画する人々が新しい文化を創造してきたのである。

一般的に外来文化には、学習→反発・批判→折衷・創造の過程を歩むものであろう。それぞれの段階において共通している精神的要因として見逃せないのが比較である。外来文化に触れたとき、最初に起こる比較は自分たちの文化とどう違うかである。次第に比較事項をどれが合理、有利、現実的または進んでいるか遅れているかに、多岐に演出されていくのである。好き嫌いの感情も比較する中で起こる。進んでいる外来文化を学びだしたとき、何を取り入れ、何を捨てるか、比較吟味が行われる。ある程度の学習期間を経て自分たちの文化に外来文化の存在感が増すにつれ批判と反発が強まる。自分たちの存在を考へ出すことと無関係ではない。そうすると、外来文化との折衷のうえに新しい文化創造への激しい動機が膨らむ。創意の時代精神である。日本の対中国文化の関係はこうした経過を踏んだに違いない。

中国の文化は中国という特定の土壌で生まれたものであって、すべてが日本の環境にそのまま即応するものではない。日中の間の現代文化に共通点があるといっても、それは古代日本が輸入した中国文化を日本の土壌に合うように取捨選択したのであって、日本独自の文化に改変されている。時間の経過とともにもとの中国文化から変質を加速させているところであろう。

日本の特徴を深めさせた動因があった。今流に言えばナショナリズムの一種にあたるかもしれない。先進文化を輸入しているうちに膨らむ自分たちのアイデンティティといったものであろう。個性があるとしても自分たちが所属する集団精神についての共通認識を伴っている。日本は、唐文化に対して発露した。和魂漢才の精神に収斂されるものである。唐とは異なる独自の文化を培う知恵の形成を進め、後世に受け継がれた。そして和魂漢才で訓練された日本人のアイデンティティが幕末・明治維新时期における西洋の衝撃には和魂洋才の精神として台頭し、20世紀初頭にはアジアにおける唯一の近代国家へと脱皮させた。

②和魂漢才から和魂洋才への遂行

日本は西洋文化に向き合うことになったとき、中国文化との経験が繰り返されたと思うのである。中国文化と西欧文化を比較する作業がまず行われたであろう。それに関する事例を多くの文献から抽出することができる。それを一々考察する作業は別論で触れることにする。ともかく、比較は芸術や文学だけに

とどまらない。生活領域を超えて、科学技術、経済、政治・外交にも及び、究極は国家体系も比較されたに違いない。これは外来文化を受容することで自分たちの文化を変容させてきた国内外の人々にとっては受け継がれてきた不可欠の国民精神でもある。複数の外来文化を目前に置き選択を迫られたとき、比較するのがもっともふつうの行為である。

日本にとって比較手法は、つねに自然発生的な壮大な歴史的プロジェクトであったといえることができる。しかし、比較という行為は自然発生的である限り、その知恵を方法論として系統的に整理したり総括したりするまでいかなかった。近代の西洋に遭遇したあとの19世紀末、フランスで成立した文学における比較法が日本に入ってきた。学問研究法として比較手法の認識である。比較するには相対化が不可欠であることは言うを俟たない。フレキシブルに新しい学術思想に対応できるのである。創造した思想・価値観を絶対化し、外来文化に対して排斥することが基本的行動のイデオロギー体質とは異質のものである。比較は日本人が古来、引き継いだ民族的文化遺産であり豊穡をもたらす精神的土壌かもしれない。豊穡の土壌のうえに創意の樹木も育つわけである。

改めて指摘すれば、比較の手法は特別な研究タイプではない。日本人に特有のものでもない。外来文化の吸収にあたって、もっとも普遍的、基本的な姿勢である。同時に人類共通の生存本能による産出であり、原生的知恵の蓄積とも捉えられる。いかなる分野におかれていても比較し合うことによって、固有の基層に変容と再生による昇華が可能になると考える。

③ マルチカルチャーを擁した新人類の要素として

モノ、情報、人間の大幅移動を阻むことができなくなっている。グローバリゼーションの現在、地域文化とボーダーレス文化の大混合が進行している。イデオロギー、政治、民族、国境を越えたマルチカルチャーを擁した新人類がどんどん成長している。二つ以上のintercultural identity (多文化間アイデンティティ) は、望むべき理念型として論じられているが、その初期型はすでに遣唐使以来続いてきた日中交流の人的交流に産出されていたはずと思われる。記録されていたものもあれば、語らぬまま去っていたものもある。中国人日本留学生や日本教習たちの立体的な遍歴はまさにマルチカルチャーを擁した新人類の典

型であろう。彼らは多文化のフォルダーを同時に持っているだけに、物事を本能的に比較し、複眼的に見る習性が物理的に身に付いたと考えられよう。時と場合によって彼らは「脱中国人」或いは「脱日本人」的な言行をすると感じられているかもしれない。彼らのありかたの根源に多文化を跨っているところがあるからこそ、表層に重層的な現象として表現されてくるのではなかろうか。おそらくある対象に向かう度に、彼らに付いている多彩なフォルダーがいつも本能的に開かれ、混合的な光を放射していくのであろう。

日中は相互に研究の成果を交流して研究を深める段階に至ったように思われる。日中両国の文化と思考の違いを現象として捉え、内の視点と外の視点を照らし合わせる比較視点が有効であろう。こうした比較は実際、日中両国の関係者である阿倍仲麻呂、鑑真たちによって自発的にされていると思われる。その人物、作品及び活動を検証したところに、どの作品や活動にも比較を伴った文化交流に基づく思考が内蔵されている。作品の行間に比較手法の綾が織り成されている。比較の観察眼が対称な日中関係の枠を超え、相互理解としての研究を深化させていくことを教えてくれている。

情報化の時代に入り、グローバル化の進化と共に日中両国の若者がどんどん「越境」していく。文化の境界はだんだん不明確になってしまう。全世界が静かに人間、モノの大移動時代に突入している。この時代に見合う共生の適応型がまだ模索されていく段階であるが、比較を伴った文化交流の精神の継承が相変わらず必須と推察している。マルチカルチャーを擁したありかたの可能性を科学的に実証する研究成果が期待されている。

④日本文化研究の可能性を

学問発展の要因の一つとして比較文化を見逃してはならない。特に古来、外来文化吸収のモデル日本を考察、研究するにあたって、比較文化の経験が前面に浮き出してくることが常道のように考える。日本人の外国研究においてもその知恵が見られる。外国人の日本研究は異文化の日本をテーマにしているから、比較研究の性格が強くなるのは当然かもしれない。ポルトガルのイエズス会士、宣教師ルイス・フロイス（1532-1597）の『ヨーロッパ文化と日本文化』（岩波文庫、2005年第24刷）、ギリシャ生まれのイギリス人ジャーナリスト小泉八雲

(ラフカディオ・ハーン、1850-1904)の『小泉八雲作品集』1～3(河出書房、1988年)、イギリスの外交官アーネスト・サトウ(1843-1929)の『一外交官の見た明治維新』(岩波文庫、2004年第61刷)、アメリカの文化人類学者ルース・ベネディクト(1887-1948)の『菊と刀』(社会思想社、1965年第30刷)、筑摩書房が1960年代初めに発刊した6巻シリーズ『外国人の見た日本』、オーストリア外交官だった上智大学教授のグレゴリー・クラーク(1936-)の『日本人 ユニークさの源泉』(サイマル出版会、1983年新版)、アメリカ出身の日本研究者ドナルド・キーン(1922-)の『日本人と日本文化』(中公新書、司馬遼太郎との共著、1985年第22刷)、アメリカの政治学者ジョン・ネスビッツ(1929-)の『日本という存在』(日本経済新聞社、1992年)など、数々の日本研究家の代表作も比較手法に満ちている。

日本研究では中国人も西洋人に伍して頑張っている。中国文学者の竹内好氏(1910-1977)は戴季陶の『日本論』(社会思想社、1972年)の解説文で、戦前戦後を通して中国人による日本研究の白眉として三つを挙げ、清国の初代日本公使参事官・黄遵憲(1848-1905)の『日本国史』(全40巻、1890年)と孫文秘書だった戴季陶(1890-1949)の『日本論』(社会思想社、1972年)、魯迅の実弟・周作人(1885-1967)の一連のエッセイ『日本談義集』(平凡社・東洋文庫、2002年)としている。3人とも中国文化を下地に日本文化との同質性と異質性を比較している。

日中比較文化研究活動について

日中は互いの文化が同種と思ひ込むことほど、危険なことはない。海外における「日本学」「日本研究」に加わる研究者が増えているという状況下で、客観的な日本認識や日本観の形成、日本文化研究の成果を確認し合うことがいよいよ重要になりつつあり、国際理解の要諦でもあると認識されている。相互理解としての文化交流政策への補完としても日中比較文化研究をより一層深化させていくことが求められている。

だが、戦後の冷戦構造にも左右されてきた不正常的な日中関係によって、中国における日本文化研究の成果が日本に伝わる機会の少ないのが残念である。研究成果の交流があれば刺激し合うことは間違いない。日本人研究者にとっても

中国人研究者にとっても貴重な方法論や参考データが得られるわけで、互いに「一石二鳥」の成果が期待できよう。

日中の相互学習による比較文化研究の深化が期待できる活動として、法政大学国際日本学研究所では以下のように展開し続けている。(1) 対話重視の資料収集と成果整理、(2) 現場重視のネットワークづくり、(3) 相互学習の再生産を求める日中文化研究会の開催。このうち日中文化研究会を2006年7月から21世紀COEプログラム「日本発信の国際日本学の構築」中のタスクフォース②「西欧(独・仏)・中国の日本文化研究の総合的研究」の一環として、以下の通り開催した。

日中文化研究会開催一覧

日程	報告者／肩書き	報告テーマ
第1回 2006.7.3(月)	李 国棟 広島大学外国語教育研究センター教授	日中齟齬の文化的研究 —時間と空間の認知傾向を中心にして—
第2回 2006.7.22(土)	三瀧 正道 麗澤大学教授	典型事例から探る日中異文化コミュニケーション
第3回 2006.8.23(水)	西岡 康宏 東京国立博物館副館長	中国・日本美術の特質について
第4回 2006.9.12(火)	スティーヴン・G・ネルソン 法政大学文学部教授	9世紀の日本と中国 —藤原貞敏の渡唐に関する記録から読み取れるもの—
第5回 2006.10.11(水)	崔 世廣 中国社会科学院日本研究所教授	日本の社会構造の特徴を探る —中国的視点から見れば
第6回 2006.11.1(水)	高橋 優子 文化学園専任講師	日本人と中国人のコミュニケーション方略に 関する一考察—謝罪という側面から
第7回 2006.11.29(水)	楊 暁文 滋賀大学国際センター助教授	豊子愷と厨川白村 —「苦悶の象徴」の受容をめぐる—
第8回 2006.12.20(水)	谷中 信一 日本女子大学文学部 教授	日本人の伝統倫理観と武士道
第9回 2007.1.24(水)	玉腰 辰己 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科博士候補生	日中映画交流史のなかの日本映画人 —川喜多長政と徳間康快の対応—
第10回 2007.3.24(土)	植木 雅俊 仏教研究家(東方学院所属)	仏教受容の仕方についての日中の比較
第11回 2007.4.25(水)	曹 大峰 北京日本学研究中心教授	対訳コーパスと多文化比較研究 —言語と翻訳の研究例—

(各回の日中文化研究会の報告趣旨を省略)

研究会を通して、謙虚に学び合い、高め合う姿勢を身に付けることができ、学際的に研究視野の射線を広げられることの可能性が見えてきた。俯瞰的に日

本文化研究の全体像を見下ろせば、特に日中の文化研究に対して比較文化の視点を持たば、古典的「同文同種」の感覚を払拭し、理性的に見詰め合う姿勢が樹立されるのである。そこから、真の意味での学术交流の地平線が広がり、相互理解としての日本文化研究がより一層発展していくことが考えられよう。そのために日中文化の同一性を大切にすると同時に、独自性への認識を持つことの必要性を改めて強調しておきたい。

研究成果

①研究成果を反映している刊行物一覧

【法政大学国際日本学研究センターが発行している刊行物】

- 1、『日中文化関係を考える——日中相互認識の「ずれ」を中心に』（法政大学国際日本第一次評価報告書 法政大学国際日本学研究所編、2005年）
- 2、『日中の文化関係を考える（その2）——文化摩擦（ずれ）から文化交流（相互理解）へ』（法政大学国際日本学第2次評価報告書 法政大学国際日本学研究所編2005年）
- 3、『日中の文化関係を考える——相互認識の「ずれ」を中心に』（外務省「日中知的交流支援事業」採択 法政大学国際日本学研究所編、2005年）
- 4、『国際日本学の構築に向けて』（法政大学国際日本学研究所編、2005年）
- 5、『国際日本学』第1号（法政大学国際日本学研究所、2003年10月）
- 6、『国際日本学』第2号（法政大学国際日本学研究所、2005年3月）
- 7、『国際日本学』第3号（法政大学国際日本学研究所、2005年3月）
- 8、『東アジア共生モデルの構築と異文化研究——文化交流とナショナリズムの交錯』（法政大学国際日本学研究所、2006年）
- 9、『相互理解としての日本研究——日中比較による新展開』（法政大学国際日本学研究所、2007年3月）
- 10、『国際日本学』第4号（法政大学国際日本学研究所、2007年3月）
- 11、『国際日本学』第5号（法政大学国際日本学研究所、2007年5月）

【市販になっている刊行物（王敏の個人研究も含めて）】

- 1、『曙光 4』「日中文化交流の明日」（2006年12月、翰林書房）

- 2、『世界の中の日本文化——摩擦と融合』（2006年9月、中国・国際文化出版
公司）
- 3、『日中2000年の不理解——異なる文化「基層」を探る』（2006年8月、朝日
新書）
- 4、『謝謝！宮沢賢治』（2006年8月、朝日文庫）
- 5、『グローバル化時代の日本人』（諏訪春雄他共著 2006年7月、勉誠出版）
- 6、『どう拓くか日中関係・政令経熱と文温の可能性』（加藤周一他3人共著、
2006年7月、かもがわ出版）
- 7、『君子の交わり、小人の交わり』（養老孟司・王敏対談、2006年6月、中公
新書ラクレ）
- 8、『中国人の愛国心——日本人とは違う五つの思考回路』（2005年10月、PHP
新書）
- 9、『日中比較・生活文化考』（2005年8月、原人舎）
- 10、『アジアネットワークリポート2005』（2005年8月、朝日新聞社）
- 11、『日中相互認識の「ずれ」』（2005年2月、勉誠出版）
- 12、『ほんとうは日本に憧れる中国人——「反日感情」の深層分析』（2005年1
月、PHP新書）
- 13、『〈意〉の文化と〈情〉の文化——中国における日本研究』（2004年10月、
中公叢書）
- 14、『なぜ噛み合わないのか—日中相互認識の誤作動』（2004年4月、日本僑報
社）
- 15、「新中国における政府主導の日本研究の一考察——国家システムの一環と
いう特殊事情」（王敏）（HP→ [http://www.asahi.com/international/
aan/haiken/haiken040531.html](http://www.asahi.com/international/aan/haiken/haiken040531.html) 朝日新聞アジアネットワーク、2004年）
- 16、『中日文史交流文集』（2005年9月、中国・上海辞書出版社）
（国内外に掲載されている関係論文を省略）

②研究成果を反映している主要な国際会議における招聘報告一覧（王敏の個人
発表も含め）

- 1、2003年5月17日 「日中交流の来た道・行く道」（四天王寺国際仏教大学

主催)

- 2、2003年10月20日 「宮沢賢治と『西遊記』」(日中友好協会など主催)
- 3、2004年8月20日～24日 中国第9回日本文学研究大会(中国社会科学院外国文学研究所など主催) 報告①「中国における日本研究の変容」、②「宮沢賢治と中国」
- 4、2004年10月15～18日 世界の中の日本文化——自国文化の融合と摩擦(中国社会科学院日本研究所主催)「日中相互認識の誤作動——日中比較の視点から」
- 5、2004年10月4日 日中文化関係を考える—相互認識の「ずれ」を中心に(法政大学国際日本学研究センター主催)「中国における日本生活文化の拡大」
- 6、2004年10月30日 日中文化関係を考える—相互認識の「ずれ」を中心に(法政大学国際日本学研究センター・中国現代国際関係研究院共催)「日中の共通認識を目指して」
- 7、2005年1月24日 文化とユートピア 東アジアの現場から(神戸大学文学部主催)「宮沢賢治とユートピア」
- 8、2005年6月1日 桜美林大学北東アジア総合研究所成立記念講演(同所主催)「二重性日本観、中国観の克服」
- 9、2005年6月14日 JAFSA総会記念講演(同会主催)「中国の留学生および留学生の日本観」
- 10、2005年6月16日 「二重性日本観、中国観の克服」(地域研究学会主催)
- 11、2005年7月3日 「自己探求としての日本研究——宮沢賢治という方法論」(日本国際文化学会全国大会主催)
- 12、2005年8月20日 「黄瀛と日本、そして同盟会」(中国同盟会設立100周年記念大会主催)
- 13、2005年9月9日 グローバルゼーションと文化の多様性(同済大学国際文化交流学院主催)
- 14、2005年9月24日 四川外国語学院日本語学部設立三十周年記念講演・日本文化と私」(同大主催)
- 15、2005年10月12日 法政大学国際日本学研究センター、研究所主催「日中共

生モデルの模索——文化交流とナショナリズムの交錯」企画・総合司会

- 16、2005年10月22日 「日中相互認識のズレおよび残された思想課題」（多文化関係学会主催）
- 17、2005年11月12日 「中国における文献研究の意味」（国際神道学会主催）
- 18、2005年12月7日 「日本文化イン中国」（世界平和研究所主催）
- 19、2006年4月15日 「日本留学110年記念大会・日本留学の啓示と知恵」（中国留日同学会主催）
- 20、2006年5月14日 「日本語教育と日中友好」（中国全国日本語コンテスト実行委員会主催）
- 21、2006年5月17日 「日本留学と相互学習の昇華」（国際協力銀行・中国財政部共催）
- 22、2006年6月3日 「平和と共生の明日に向かって」（日本ユネスコ協会連盟主催）
- 23、2006年12月5日 「Cultural Diplomacy」（CENTER FOR ASIAN STUDIES AMERICAN UNIVERSITY WASHINGTON,DC主催）

③研究成果を反映している刊行物の大学入試問題への採択（王敏の個人研究も含め）

（詳細を省略）2006年 3件

2007年 3件

④研究成果を反映している刊行物が日中の大学教材または副教材の一環として使用（王敏の個人研究も含め）

日本・国立大学は福島大学ほか

県立大学は山口県立大学ほか

私立大学は明治大学ほか

中国・北京大学ほか

⑤研究成果を反映している刊行物に関する書評、紹介（王敏の個人研究も含め）

日中両国・約50数件（詳細を省略）

- ⑥同研究について来訪した外国研究者の訪問者の国別（王敏の個人研究も含め）アメリカ、デンマーク、オーストラリア、韓国、中国（詳細を省略）
- ⑦同研究の成果を中心に学ぶために受け入れた中国政府派遣若手研究者三名（うち中国政府の派遣資金利用者一名、日本政府ODA支援金利用者二名。受け入れ期間は2006年10月から2007年10月までとなる）

国際日本学研究における今後の課題

①双方向の「克服」と「開放」を目指して

おそらく、どの文化にも「内向き」に陥りやすい一面があると思われる。それはグローバル化とは相克し、国際化とも逆ベクトルの関係である。国際日本学研究に携わるものは「内向き」思考の克服を心がけるべきであろう。研究者同士の双方向、多方向の協力によって、双方とも自国の文化に対する「内」のありかたと、「外」からの受けとめ方、外の求めたいところに注意を払い、謙虚に学び合う知的ネットワークづくりに今後も力を入れなければならない。

国際日本学研究の性格から考えれば、研究における「縄張り」の姿勢をなくすべきであろう。外国人として外から見た場合、「縦割り」型対人関係や「ムラ」のありかたが結果的に他分野の研究者や外国人への排除姿勢として受けとめられるときもある。この場合はお互いに「異文化」という構図の中で双方向の自己改革が望まれるであろう。

日本は世界における日本研究の現場として求心力があるから、全世界の日本研究者が日本研究に人生を賭けているのである。それは日本にとって誇りであり、歓迎すべきことではないか。日本の魅力を一層広げていくためにも外国人研究者の吸引が必要であろう。外国人研究者の参与によって、むしろ、日本研究の分野が拡大し、地盤が固められていくものである。日本には国際競争力を持つ開かれた研究体制が求められていると思われる。

②等身大の文化観の樹立を

一般論として、自国の文化を知ることを通して誇りを抱く。自国の文化を誇

れる心情を持つことによって他国の人々の文化観を囚れば、「等身大」という言葉の極意がわかってくるはずである。しかし、文化の違いによって、違うものへの排除感覚が無意識に誤作動してしまうことが往々にある。等身大の姿勢が日常化になりにくい面がある。総じて、日中の間には、自国文化を知ることが異文化を知る基礎であるという認識が薄いように思われる。特に戦後の日本は西欧を基準にしてきたから、日本研究も西洋基準の研究に熱を上げるように思われる。「洋才」はあくまでも「漢才」と並んでいて、「和魂」の両輪であることを再認識していただきたい。バランスのとれた等身大の文化観を持てれば、日本文化を西洋とアジアに問わず、異文化圏の人々に理解されるように説明できるはずである。日本文化の国際性を進化させるために、この基本的な問題意識を一層強く持ってもよいのではなからうか。

③多面的方法論の探求

国際的日本学研究の本質に迫るには多分野の方法論に学ぶことが必要と考えられる。例えば、「参与手法」が文化人類学におけるフィールドワークである。大衆の中で広がっている愛憎のアンビヴァレンスの感情が錯綜する日本観の研究を分析するにあたって、体験的、総合的考察に有効であると思われる。多分野にわたる細分化研究の「有機関連」を踏まえうえでの究明が日中比較文化研究に繋がっていくのが自然の流れであろう。さらにこの流れは国際日本学研究の目指す目的に向かい、グローバル化の社会が要求する研究者の使命へ撥ね返るものであろう。

④アジア観の再考と平和発信の日本文化

敗戦後の日本が戦争への反省を視野に入れた文化大国への建設に奮い立ったが、いつの間にか「文化」が置き去りにされ、経済を優先した経済大国になってしまった。その後、「失われた10年」が続き、基軸を見失う状況が続いている。このときこそ日本の外を見回してみれば、新しい発見に気付かされるであろう。日本発信の生活文化、大衆文化が世界に歓迎されている。そこにはソフトパワーが見え隠れしており、それを外国では見出し、活用している。日本にとっては、それこそが忘れられたかつての「文化大国」を象徴するポイントで

はなかろうか。

特に戦争の被害地域であるアジアで広がっている日本文化ブームが鏡となり、日本の平和発信の可能性を写して、その活写が効果として受けとめられている。アジアへの平和発信にもたらしてくれた希望として理解されてもよからう。相互理解としての平和発信が実現でき、双方向にとっても冷静に等身大の文化観が伝わるに違いない。

ただし、日本におけるアジア観の見直しが必要であろう。西欧中心主義との比較によってアジア的機軸の再構築が試みられてもよからう。今こそアジア認識を再考すべき機会として真剣に向き合うよう、心から願う次第である。

⑤非日本文化研究専門家の成果に注目を

欧米留学の帰国生の中から日本に関係する研究が生まれている。ドイツ留学生だった袁志英は同済大学の教授として戻った後、1930年代のナチスドイツの迫害を逃れて上海租界に集まった欧州系ユダヤ人の新聞の日本観に注目し「黄報 (Gelbe Post)、シュトルファーと黄報における日本観」を寄稿した。ドイツ、中国、日本の三つの国に関係したテーマはこれまでにない視点である。日本研究を向上させるものと期待できよう。

研究対象にしたのはオーストリア出身のユダヤ人アドルフ・ヨゼフ・シュトルファーがほとんど一人でつくっていた新聞「黄報」(復刊)である。その中の日本をめぐる記事18編を取り上げ、上海ユダヤ人の対日認識に若干の分析を加えている。記事の多くは転載したもので、もともとはドイツのジャーナリストたちが書いた。「源氏物語」や「唐人お吉」が登場し、日本人の米国移民の歴史、日本における精神分析学の普及の様子、天皇を中心とする日本の国家体制など実に幅広く、当時のドイツ人、ユダヤ人による日本像が紹介されている。通曉したドイツ語の力を生かし、見逃されていた新聞資料に目をつけた袁の研究心はすばらしい。

「黄報」は、日本の影響が強まる上海で身を処していくため中立という編集方針を貫いたという。記事が映し出す日本は、肯定的な「すぐれた文化を持つ日本」と否定的な「侵略を進める日本」に分かれる。発行者シュトルファー自身の日本観を反映したと考えられるが、ナチスに追われた彼自身が列強に食い

荒らされる中国側に同情し、日本の侵略行為にも強く反対していたことを示している。

第三者の視点として2004年に『再び奮い立つ日本』が中国の中信出版社より発刊された。著者はフランスで博士号をとった李培林。中国社会科学院社会学研究所副所長を務める社会学者である。これまで日本に直接にかかわったことのない氏は2003年、日本学術振興会の助成により慶応義塾大学に留学した。その期間の体験を記したのが本書である。筆者は氏から次の感想を伺った。

「『菊と刀』の著者も日本に行ったことはなかった。だが、社会学研究の方法論は不特定の国に応用できると思います。それで、思い切って日本を考察し、分析してみたものを本にしたのです」

⑥論文の評価にあたって

中国人研究者との協力関係を高度な共同作業に押し上げるうえで、日本語が「壁」になろう。漢字、平仮名、片仮名の三つの書き言葉を持つ日本語の深みは、外国語習得に共通した難しさを超えるものである。「同文同種」にあっても、微妙なニュアンスを理解するのは至難である。日本で、外国語表記を尊重するといわれる背景である。外国人が挑戦した日本語論文に掲載の機会を自由に与えることが広まっている。中国では、北京国際日本研究センター主宰の雑誌『日本学研究』がその一つである。日本でも同様の学術誌があり、国際日本文化学術センターや京都大学などが提供している。外国研究者との共同作業や論文掲載誌の刊行にあたっては、使用言語をどうするか、事前に基準を決めることは不可欠であろう。

論文の書き方として、中国では新視点の提出、社会に役立つ俯瞰型の論文が評価される。綿密にデータを並べ、細分化された先行研究重視型や微観的専門研究に、日本では許容されるこうした型の論文は歓迎されないのがふつうである。韓国でも帰国後、日本で学んだ論文記述が批判されると体験者に聞いた。このように、研究者として成果発表の場である論文記述をめぐる、日中の間に「溝」があることを知っていただきたい。日本から中国に戻った優秀な頭脳が論文記述に戸惑い、改めて母国の論文のありかたを学ぶことも多いのである。研究方法にも影響する苦悩といえよう。日中の学術交流が今後も増えていくた

め、研究の姿勢である論文の書き方も、両国の間で「妥協点」を築かなければならない。

以上が国際日本学研究の4年間の記録の断片である。日中比較文化研究方法論の模索に終始したように思う。たどり着いたところに相互理解としての日中比較文化研究の可能性が見えてきた。それもこれまでの研究活動を支援していただいた日中両国の多くの方々に導かれてきたからと痛感している。未熟な拙文は研究成果にはほど遠いことと反省している。しかし、国際日本学研究構築へ、ささやかなりとも教訓として参考になるところがあれば幸いである。

COEテーマタスクフォース③

世界の中の能楽

山中玲子

I 2002～04年度（中間評価以前）

本タスクフォースは、主として能楽研究所が担当した。能楽研究所は1952年の創立以来、資料の充実・整備とその公開に努め、能楽研究に寄与するとともに、国内外の多くの研究者の育成に貢献してきたが、COE事業の拠点の一つとしては、従来の活動に加え、能楽が日本および世界の文化に与えた役割の分析や、能楽が日本を代表する芸術として認知される過程の解明をめざして活動することとなった。2004年の中間評価を受けて当初の研究計画は軌道修正されており、その点に関してはどのように軌道修正をしたかということと併せて後に詳述するが、まずは基礎作業として、外国人の能楽発見とその研究史を整理することをめざし、外国の研究機関や外国人研究者との連携を図りながら、主として以下の課題に取り組んだ。

- a. 外国語で書かれた能楽資料の調査と収集
- b. 能楽面ほか在外能楽資料の調査
- c. 外国語文献リストの作成
- d. 在外能楽資料リストの作成

これらのうち、在外能楽資料に関しては、その調査（上記b）までは実現したが、網羅的なリストの作成（上記d）までは至らなかった。しかし、a・cについては今後の研究の基礎となる、大きな成果を上げることができた。

その第一は、『21世紀COE国際日本学研究叢書1』として刊行した『外国人の能楽研究』（編集・野上記念法政大学能楽研究所、発行・法政大学国際日本学研究センター。2005年3月）である。本書は、2003年7、8月に本学博物館展示室で開催した能楽資料展「世界の中の能－外国人の能楽研究」の配布資料と、同年7月1・2・8・9・16日の5日間、ボアソナードタワー26階スカイホールで開かれた第8回法政大学能楽セミナー「能に注がれた外国人のまなざし」の講演記録とに基づいて編まれたもので、全体の内容は、以下に記す通りである。

I. 能に注がれた外国人のまなざし

先駆者たちが見た能楽	川村ハツエ
ペルツィンスキーの能面研究	西野春雄
能翻訳の変化／この100年	モニカ・バーテ
クローデルと能	渡邊守章
海外公演で感じたこと	
- 1954年のヴェネチア演劇祭ほか -	観世榮夫

II. 能楽関係外国語文献目録

二つ目の成果としては、日本美術史家フリードリッヒ・ペルツィンスキー著『日本の仮面－能・狂言』（1925年刊、ベルリン）の邦訳書刊行（2007年3月）を挙げることができよう。同書は能楽面事典としての機能も備えており、能面研究書の古典としての価値に加え、広く日本美術・日本文化に関する研究書としての価値もある。ちなみに、当時の日本においてはこれに匹敵する研究書は生まれていなかった。本書の概要および吉田次郎氏（京都大学名誉教授）による翻訳原稿出現の経緯などの詳細は、西野春雄が能楽研究所紀要『能楽研究』第26号・第27号・第28号（2002年3月、2003年3月、2004年4月）に報告した通りである。日本語訳の素稿を提供して下さった吉田次郎氏の学恩には感謝してもしきれないが、原文のドイツ語が古いスタイルで難解なうえ、時代的制約から来る研究上の誤りのせいでさらに判りにくくなっているものを、能の専門家ではない吉田氏が訳されたため、当然ながら誤訳や、意味の通らない箇所も多い。それらをより読みやすく意味の通る日本語に直して刊行する仕事は、過去の誤謬についても最新の研究成果も、著者が引用している原資料についても、多くの情報を持っている能楽研究所でこそ、行われるべきことと判断し、また、吉田氏からも「自由に手を入れてよし」との許可をいただいたので、研究所専任所員の山中が中心となり、兼任所員の宮本圭造、国際文化学部山根恵子教授、大阪学院大学のシルヴァン・ギニャール教授らの協力を得て、訳文の大幅な見直しと改訂を行った。さらに、ペルツィンスキーが引用している日本語文献の確定や、当時の誤った説に基づいているために現代の読者の混乱を招きかねない言説への注記など、編者注もいささか加え、索引も、原本の索引の訳ではなく、新たに人名・曲名・書名・面の名前に分けて取り直すこととし

た。なお、編者注のための文献調査および索引作成には、大学院生やオーバードクターの若手研究者の助力を得ている。

ちなみに、2005年7月に出版された英訳版（Dover Publications）は、能面の写真（キャプション付き）に能楽概説風の数頁が添えられただけのもので、膨大な本文がすべてカットされていた。ドイツ語を日本語にするより英語に翻訳した方が、ずっと読みやすそうに思われるが、引用された能作品・能面関係資料に関する詳しい注や、あるいはベルツィンスキーが気取った言い回しで何を言いたかったのかについて、能に関する十分な知識に基づいて説明する注が無ければ、単にドイツ語で書かれた言葉を英語にしても、内容が理解できないという判断があったのだろうと推測している。そうであればなおさら、現代の研究水準からの、きちんとした注を付けた日本語訳の出版の意義は大きいだろう。次のステップとして、この日本語訳を基にして（あるいは参照して）の英訳も可能と思われる。

以上が、中間評価以前に本タスクフォースが上げた主たる成果である。このほか、「能楽資料のデジタル化と国際発信」の一つとして、江戸時代の能番組のデータベース（データ数約7000）公開を実現し、また、ドイツ、米国、タイ、中国からの研究者を受け入れる一方、ボン大学（ドイツ）、フィレンツェ大学（イタリア）、コロンビア大学、ピッツバーグ大学、オハイオ州立大学（以上米国）等、欧米各地での日本文学に関する研究集会、展覧会、ワークショップ等に招かれて能に関する数々の講演を行うなど、能楽研究の国際的展開の基盤となる情報の共有や人的交流も、積極的に行ったことを付け加えておく。

II 2005～06年度

2004年12月に、本事業に対する中間評価が発表された。能楽研究所に関わる評価としては「国際日本学の構築と発信」というプログラム全体の中に研究所の活動がどう位置づけられるのかが曖昧であるとの指摘があり、もっともな批判として受け止めるしかなかった。能楽研究所は研究所なりに「世界の中の能楽」というテーマに沿った活動を進めてきたつもりだったが、一方で、「日本の中の異文化研究」、「メタ・サイエンス」という本事業の最も重要な二本の柱

が、我々の研究活動とはうまく結びつかないというのは、所員の実感でもあったのである。

そこで、中間評価以後は、沖縄文化研究所に「異文化研究」を、国際日本学研究所を中心としたタスクフォース①に「メタ・サイエンス」を任せ、能楽研究所は、「国際日本学の構築と発信」の一つの具体例として活動し、理論構築のための材料を提供することを自らの役割と定めた。研究対象が日本固有の舞台芸術であり、第一次資料の大部分が日本に在る（しかも日本語で書かれたものである）能楽研究の中心は、言うまでもなく日本であり、能楽研究所はそのまた中心にいるという自負を持ってもいたが、従来の国際交流のあり方——能楽研究の第一人者として海外に呼ばれ、国内では周知のことについて日本語で話してくる、あるいは、研究所を訪れた外国人研究者の便宜を図り、資料を提供する（が、その資料に基づいて書かれた外国語の論文を読んでいる日本人の研究者はほとんどいない）という状況——から一歩踏み出してみようということである。完璧に内側を向いて、それでも成り立っている（しかし当然ながらそれは、非常に狭い領域で研究者の数も限られ、国際的にメジャーなものではない）学問領域を、外に向かって開いていき、能楽研究自体を広げていくとともに、その過程で新たに得た視点やぶつかった壁などを、タスクフォース①に還元することで、別の分野にも応用可能な理論に結びつけることを、最終目標としたのである。

これはけっして、能楽研究所がCOEのめざすところを無視して勝手に活動するという意味ではない。むしろ、このようなスタイルは、「国際日本学」という枠組みの中に置かれ、他領域の研究状況に触れた結果であること、また特に軌道修正後の2年間の活動の中で次第に固まってきたものであることを強調しておきたい。具体例を挙げる。国際日本学研究所主催の研究会で北海道大学の桑山敬己氏は、「文化人類学の分野では、英米が圧倒的に優位に立ち研究の中心を形作っており、ヨーロッパがその次、アジアの学者は周縁におり、周縁の学者は中心の研究状況や情報に常に接していることが必須だが、中心にいる者にとっては周縁の研究成果などどうでもいいのだ」といった、学問自体のヒエラルキーについて話をされたが、それはそのまま、我々日本の能楽研究者（おそらくは他の日本文学や日本史学等の領域でも同様だろう）が外国人研究者と

交流はするが、彼らの論文をいっさい読まなくても不自由なく研究者として活動できてしまう状況にあてはまるものだった。桑山氏によるメタ・サイエンスの言説に触れて初めて気づかされ、「それでは一步踏み出してみよう。能楽研究の中心と自負する能楽研究所が踏み出せば状況を変えられるかもしれない」と考えたのである。非常にプリミティブな発想ではあったが、2005年12月にパリで行われた国際日本学シンポジウム「日本学とは何か—ヨーロッパから見た日本研究、日本から見た日本研究」での口頭発表の中にこうした立場表明を含めたところ、多くの参加者から力強い支持を得ることができた。

さらに、2006年3月のトリア大学での国際シンポジウムNō Theatre Transversalでは、欧米7カ国と日本からの研究者（日本文学、日本学、演劇学、音楽学、演劇人類学等多種にわたる）と演出家、役者が集まり、新作能の試みと意義、他のジャンルとの共同作業、外国の演劇や音楽への影響、女流能楽師の活動、戦時中に戦意高揚のために作られた能、山形の黒川能が現代の社会状況の中で抱える矛盾等々、伝統芸能である「能楽」が現代社会の中で、あるいは国際的な文化交流の中で向き合ってきた（今後も向き合っていかなければならない）様々な問題が取り上げられた。能の枠組みを破ろうという試みは、しかしどこまで能と言えるのか。能の境界線が広がっていくのを良しとするか危険と見るか。「黒川能」は中央の能と同一視されることはないものの、芸能の本来の豊かさを留める貴重な例として、間違いなく黒川の「能」と認識されているが、それでは「英語能」の位置づけはどうか。こうした議論は最終的には「何を以て能と呼ぶか」「能の本質とは何か」という問題に通じていく。能楽研究が狭く閉じている間に、現代に生き、世界で注目されている能を取り巻く状況は、ずっと先まで進んでいることに気づかされ、単に、国内↔️国外というだけでなく、伝統芸能↔️同時代演劇、研究者↔️実演関係者など、様々な様相を視野に入れつつ能楽研究の新しい局面を切り開いて行かねばならないことが、実感された。こうした実感や手応えは、どれも5年前の能楽研究所には考えられなかったものであり、COEプログラム「日本発信の国際日本学の構築」の事業推進拠点として活動する中で新たに獲得したものなのである。

以下では、如上の役割意識をもって、能楽研究所が中間評価後の2年間にを行った活動とその成果を具体的に記す。

1) 能の翻訳をめぐる研究と教育

後半2年間のタスクフォース③にとって最も大きな成果は、大学院で2年間続けた「謡曲の英訳を読む」ゼミと、その延長線上に実現した国際研究集会「能の翻訳を考える」である。

2005年4月から大学院のゼミ「謡曲の英訳を読む」を開始した。演習は、国際日本学インスティテュートの授業として行ったが、国際文化学部竹内晶子専任講師、日本文学科のS.ネルソン教授も常時参加し、指導にあってくれた。また、ピッツバーグ大学のメイ・スメサースト教授、コロンビア大学博士課程在籍で日本文学の翻訳家でもあるマイケル・エメリック氏などの参加もあり、さらにプリンストン大学博士課程の留学生なども加わって、個々の単語の微妙なニュアンスや個人的な語感の相違などまでも含めて議論が行われた。

スメサースト教授が参加されたときは、ちょうど同氏が英訳した能〈女郎花〉を輪読している最中だったため、翻訳者自身から、なぜその言葉を選んだのか、深い意図を話してもらったり、あるいはゼミの参加者と話し合っているうちにスメサースト氏が自らの訳を変えたことなどもあり、大学院生たちにとっては貴重で贅沢な体験であった。

2年間のゼミの詳細については、別稿で詳しく述べるが、大学院生にとっては2年間の勉強のまとめとして、またより広くは、タスクフォース③の総括として、12月15日（金）～17日（日）の3日間、富士見坂校舎1階会議室およびボアソナードタワー26階スカイホールにおいて、能楽研究所、国際日本学研究中心、同研究所による国際日本学研究集会「能の翻訳を考える－文化の翻訳はいかにして可能か－」を開催した。現在第一線で活躍しておられる外国人能楽研究者を多数招き、3日間でのべ300人を越える参加者が、能の翻訳をめぐる多様な問題について活発な議論を交わした。

初日には、上記大学院の授業「謡曲の英訳を読む」の報告と、実際に〈千手〉〈田村〉の英訳を読むワークショップを行い、外からの参加者とも問題意識を共有できるように努めた。そのうえで、第二日はロイヤル・タイラー氏の講演「能翻訳を考える」とシンポジウム「謡曲の翻訳をめぐる」を、第三日にはシンポジウム「能楽論の翻訳をめぐる」を据え、さらに、第一線の研究者による研究報告や本学大学院生による研究発表等も併せ、能の翻訳をめぐるでき

る限り多くの問題について触れつつ、文化の翻訳という問題につなげていくことをめざした。3日間の詳細なスケジュールは次の通りである。

12月15日（金） 13時00分～16時30分 富士見坂校舎 会議室

【報告】

大学院ゼミ「謡曲の英訳を読む」の報告 山中玲子（法政大学教授）

【ワークショップ】

〈千手〉 スティーヴン・ネルソン（法政大学教授）

〈田村〉 ジョン・プロウカリング（法政大学教授）

12月16日（土） 10時00分～18時00分 ボアソナードタワー26階スカイホール

【研究報告】

「謡曲翻訳の歴史」 マイケル・ワトソン（明治学院大学教授）

【講演・討議】

「能翻訳を考える」 ロイヤル・タイラー（オーストラリア国立大学名誉教授）

【研究報告】

「フェノロサ・パウンド・小西甚一―翻訳における創造的誤解」

竹内晶子（法政大学専任講師）

【シンポジウム（1）】 謡曲の翻訳をめぐって 司会：山中玲子

「演出理解を高めるための能翻訳」 モニカ・ベーテ（大谷大学教授）

「言語の浮き橋―禅竹の謡曲を英訳すること―」

ポール・S・アトキンス（ワシントン大学シアトル校助教授）

「謡曲にとって詩とは何か」

マイケル・エメリック（翻訳家・コロンビア大学大学院生）

12月17日（日） 10時00分～17時30分 ボアソナードタワー26階スカイホール

【研究発表】（法政大学大学院生）

「和解の過程―〈弱法師〉と『リア王』における二組の父子を中心に」

式町真紀子

「『なつかし』様々―〈井筒〉〈野宮〉を中心として」

柳瀬千穂

「遊女の恋の能としての〈班女〉－R.タイラー氏訳を端緒として－」 小川健一

【報告】

「能楽論文用語英訳リストに関する会議の報告」

中司由起子（法政大学兼任講師）・伊海孝充（法政大学兼任講師）

【研究報告】

「ヨーロッパにおける能翻訳」 スタンカ・ショルツ（トリア大学教授）

【シンポジウム（2）】能楽論の翻訳をめぐる

司会：衣笠正晃（法政大学教授）

「能楽論の翻訳をめぐる所感、二つ三つ」 表章（法政大学名誉教授）

「世阿弥の英語」 トム・ヘヤー（プリンストン大学教授）

「“心より心に伝ふる花”は英訳可能か」

シェリー・フェノ・クイン（オハイオ州立大学教授）

能翻訳の第一人者であるロイヤル・タイラー氏の講演をはじめ、シンポジウムのスピーカーや研究報告者となった外国人研究者は、日本語で書かれた能の作品や能楽論のテキストを研究対象にし、あるいは謡曲や能楽論の翻訳に取り組んできた、世界的な研究者たちである。彼らの報告は、多くの古典作品を素材とし掛詞・縁語等を駆使した謡曲の複雑なテキストや、世阿弥が自分自身の創出した新しい芸術について本来「以心伝心」としか言いようのない「何か」を伝えようと紡ぎ出した能楽論の言葉を、外国語に翻訳するときどんな問題が起り、どんな困難を乗り越えなければならないか、そしてまた、その困難を乗り越えて（あるいは、その困難にもかかわらず）どんなに豊かな成果が生まれ得るのか、様々な事例によって教えてくれる、非常に刺激的なものだった。また、ある固有の文化に根ざす何かを他の文化へと伝える（翻訳する）ときに考えねばならない根本的な問題に触れる報告も複数あり、「能の翻訳」を考えることが、より広く「言葉」や「文学」そのものについて考えること、あるいは「文化伝達」の問題等につながっていくことを示唆して、11月にタスクフォース①を中心に行ったもう一つのシンポジウム「国際日本学－ことばとことばを越えるもの」とも響き合うものであった。

一方、大学院生の研究発表も、英訳を通して能作品を読むことで手に入れた

新たな視点をそれぞれに活かしており、作品研究の新しい方法論の可能性を示していた。日本の能楽研究を長年リードしてきた大家が、大学院生の発表を聞いて「なるほどこういう作品研究の方法も面白いし、有効である」とコメントしてくれたのは、人材育成の面でも、こうした新しい方法が既存の「権威」に認められたということで、大いに力づけられることだった。能楽研究の権威だけでなく、『源氏物語』研究や軍記文学研究、シェイクスピア研究の大家たちが参加してくれたのは、予想外の歓びであるとともに、この研究集会やそこに集まった世界的な研究者たちの発表が大きな注目を集めていたことの現れであると自負している。

シンポジウムや研究発表では、法政の大学院生が世界的な研究者たちに対して臆することなく質問し意見を述べる姿が注目を集めたが、彼らにしてみれば、2年間苦勞して英訳に取り組んできて、どうしても納得のいかないこと、確かめたいこと、あるいは英訳に刺激されて思いついてしまった作品解釈の新しい視点など、実際に翻訳者本人に質問したり、ぶつけてみたいことでいっぱいだったのである。ゼミの最中から「ここは御本人に聞いてみよう」「これも確認してみよう」と、いわば手ぐすねを引いて、待っていたのである。実際、国内のどんなに有名な能楽研究者も、例えば能〈松風〉や〈井筒〉〈野宮〉〈砧〉等の英訳に関して、彼らほどたくさんのかたを勉強した人は、そういないはずである。そうした彼らの熱心な姿勢に、外国人研究者の方々も非常に好意的に誠実に応えてくださった。その和やかな雰囲気の後押しされる形で、フロアからの質問も、著名な研究者だけでなく、日本人学生、他大学に留学している外国人学生、能役者等、通常のシンポジウムや学会等ではあまり発言しない人たちからも多く寄せられることとなり、結果的に集会全体が非常に盛り上がることとなった。

本研究集会の趣意書には、今回の企画が、「外国人の能楽研究者と共通の土俵に立ち、真に対等で刺激的な議論を行ない得ているか」「できていないのなら何が不足しているのか」という問題を考えることともつながっているはずである、と記したが、研究集会を終えて、「真に対等で刺激的な議論」は可能であるとの思いを強めている。豊かで知的刺激に満ちた3日間であったとの感想は、登壇者からもフロアからも多く頂戴したが、なかでも、他大学の大学院生

や留学生たちが、「自分たちもやりたい」「研究会に参加したい」と面白がってくれたことは、大きな成果と受け止めている。

登壇者のうち、ロイヤル・タイラー氏とポール・アトキンス氏（ワシントン大学）は、2007年度も法政の大学院生を中心とする若手研究者たちのための講義や研究会への出席のために来日することを快諾してくれている。また、この研究集会出席者を中心とした内外の研究者チームを作り、英語版の能楽用語事典を編集する企画も立ち上がっている。今回の成果のうえに、より広くまた若い世代も組み入れて、国内外の研究者が本当の意味で対等かつ率直に意見を交わし能楽研究の新しい側面を切り開いていく道筋が、着々とでき上がりつつあることを報告しておきたい。

2) 国内外へ向けた情報発信

能番組のデータベース公開に続き、能楽研究所、鴻山文庫等所蔵の貴重資料の画像公開も、本格的に開始した。画像の撮影は既にかかなり進んでいたが、沖縄文化研究所、国際日本学研究所と共通の様式でデータベース化するための設定や、各資料の書誌データ打込みなどに手間がかかり、当初の計画よりは遅れているが、今後も、総数50,000冊に及ぶ能楽関連資料のうち、室町時代の写本等、特に貴重なものからデジタル化し、インターネットを通じて国内外に向け発信していく予定である。

また、2005年度からはコーネル大学主導の GloPAC (Global Performing Arts Consortium) にも正式なメンバーとして参加し、能楽関係のデータベース作成 (GloPAD) に協力している。貴重資料の画像を提供するだけでなく、2005年・06年連続で、本拠点の事業推進者 (山中玲子、Steven Nelson) がコーネル大学に赴き、書誌データの記入、キーワードのチェック等、データベース全般に関わるエディターとして活動した。同時に、GloPACのもう一つの柱である教育資源の開発 (Japanese Performing Arts Resource Consortium) においても、中心的メンバーとして、ミーティングやワークショップを重ね、日本の芸能に関するインターネット上の教育プログラム作成の準備を進めている。これらの活動は、COE事業終了後も継続していく。

3) その他の活動

国際交流基金、早稲田大学演劇博物館と能楽研究所との協力で「伝統演劇の海外公演に関する研究会－能楽部会」を組織し、能の海外公演の意義や将来のあり方等についての議論を重ねている。2006年3月には、早稲田大学演劇博物館館長の竹本幹夫と能楽研究所の山中との連名で、共同研究「日本古典芸能の海外公演における新しい評価基準の策定と国際交流学の提唱－能楽部門－」の報告書を国際交流基金に提出している。

最後になったが、2007年度より始まる、能楽研究者育成に特化した教育プログラム「能楽研究者育成プログラム」も、本COE事業の延長線上に位置づけられるものである。本プログラムでは能楽理論・作品研究・資料研究などの基礎的な研究能力を高めるためのコースワークと、現代芸術としての能楽の意義を探究し、海外における能楽理解を究明するためのコースワークが設けられている。研究指導の面では、日本文学専攻・国際日本学インスティテュート・能楽研究所教員のうち5名あたり、能楽だけでなく、文学・音楽史の側からの指導も行うこととなっているが、こうした学内横断的な協力体制や、そこに常に国際的な視点を盛り込む方向性もまた、5年間のCOE事業を進める中で確実に根付いてきたものだと認識している。

COEテーマタスクフォース④

国際沖縄学の構築

吉 成 直 樹

はじめに

COE事業は2002年度より開始され、さまざまなタスクフォースを包括するシンポジウムを除いては、沖縄部門では2003年5月のサテライトシンポジウム『沖縄のアイデンティティー新しい自治に向けて』、2004年3月には4日間にわたって『国際シンポジウム 沖縄のアイデンティティ』が開催された。これらのシンポジウムには、今後の沖縄研究を展望する上で重要な内容を含んでいるが、その成果の具体的な記述は、すでに刊行されている報告書に譲ることにしたい。

ここではCOE事業における成果を、研究会活動で展開された議論と、それに基づく刊行物を紹介することによってかえたい。

1 日本の中の異文化としての沖縄研究

COE事業の柱のひとつに「沖縄を日本の中の異文化として捉える」という課題が設定されており、事業開始時点からその課題に取り組んできた。

琉球・沖縄と本土の文化を考える上で避けて通ることができないのは「日琉同祖論」に関する問題であることは言うまでもない。「民族」とは実体があるようでいながらないものであり（「名付け」ではなく「名乗り」が問題になる）、近年、エスニシティ論の立場から「日琉同祖論」が批判にさらされるのは当然のことと言ってよい。近代期に「琉球民族」が「大和民族」と民族的統一を果たしたとされることは政治的言説にほかならない。

それと軌を一にするように、琉球・沖縄文化を本土文化とは独立したひとつの文化とみなすこともまた当然のこととなっている。しかし、そのように単純に割り切ることのできない問題をはらんでいるのも事実である。なぜなら、「日本本土語」と「琉球語」は姉妹語であり（P音、係り結び、語尾変化の共通性と理論的推定が揺るぎない根拠とされる）、その分岐の時点を2、3～6、7世紀頃とみるのが通説になっているからである。研究者によっては、今から

3,000年前頃まで遡らせる議論もある。このことは、「民族」としては異なるが、言語などの面では古くからの共通性を持つという考えに帰着することになる。この点で、琉球・沖縄文化をあらかじめ「日本の中の異文化」とみなすことは可能かという問題が生じることになる。

琉球語として括られるのは、奄美諸島から八重山諸島にいたる地域である。この地域は考古学的にみて奄美、沖縄の各諸島と宮古、八重山の各諸島のふたつの地域に分けることができる。前者は縄文以降、本土文化とのかかわりが深く、後者は沖縄のグスク時代（11～12世紀頃から開始）にいたるまでは、南方島嶼（フィリピン、インドネシアなど）との結びつきが一貫して強いとされる。つまり、宮古、八重山諸島は考古学的に知られる文化は南方的であるにもかかわらず、従来の研究に従えば、言語だけは日本本土語と共通した祖語を持つと考えざるを得ないことになる。この矛盾に答えることができないならば、「日本本土語」と「琉球語」は姉妹語であるとは簡単には言えない。

上記の「日琉同祖論」を「民族」をめぐる問題を峻別するかたちで「文化」の側面に限定し、さまざまな問題に取り組むために、2ヶ月に一回程度の割合で研究会を開催した。

そうした議論の過程で明らかになったことのひとつは、グスク時代開始から琉球王国の成立にいたるまでの歴史過程を明らかにすることによって、琉球・沖縄文化が本土文化との関係についての議論がより鮮明になるのではないかということである。その模索の段階で、『おもろさうし』と呼ばれる、首里王府が16～17世紀に編纂した祭式歌謡から歴史を復元する試みが展開されることになった。『おもろさうし』を取り上げた理由は、簡単に要約すれば以下の諸点である。

①この時代における同時代史料は、琉球には『歴代寶案』という外交文書があるのみであり、また『明実録』『高麗史』『朝鮮王朝実録』などに琉球関連の記事があるが、これらの記述の間には齟齬があり、解釈に問題を残す。②考古資料は沖縄諸島においては編年が十分に確定していないこともあり、これも十分な資料とは言えない側面がある。③『おもろさうし』は「人々によって信じられた歴史」を謡うが、それが史料、考古学資料、民俗（民族）学の知見などと整合する場合は「事実」とみなすことが可能になる。

③の前提に立って『おもろさうし』を検討し、他の史資料と照合させた結果、王国成立に先行する三山時代という歴史時代は存在しなかったこと、第一尚氏とは港市国家として性格を持ち、面的な国家ではなかったこと、面的な国家が形成され、整備されるようになるのは、琉球王国内部の姿を窺わせる文字資料が残され、各地に辞令書が残されるようになる16世紀初頭であったことなどの結論を得た。また、琉球王国の形成に大きな役割を果たした人々として、対馬、壱岐、さらに朝鮮などの要素が認められることから、日朝海域を拠点にしていた前期倭寇による外的衝撃という問題が視野に入ることになった。そして、それを裏づける『おもろさうし』の資料として「沖縄按司襲い(国王)」が中心になって、「下の世の主」が盗んだものを「身につける」「甕のなかに入れる」などと謡われるおもろ群(倭寇おもろ群)があることをあげることができる¹⁾。

さらに最近の奄美考古学の進展による成果によれば、沖縄諸島が、その内的発展によって琉球王国にいたる歴史的過程を辿ったのではなく、外的衝撃によって一気に王国形成への道筋がつけられたという。奄美諸島の喜界島を拠点とする在地性のきわめて乏しい遺跡を残す集団が11世紀以降、徳之島においてカムイ焼(朝鮮半島西南部の陶芸技術を引く類須恵器)の生産を行い、さらに沖縄諸島以南にカムイ焼、滑石製石鍋(長崎県西彼杵半島産)、中国陶磁などを流通させ、奄美諸島から八重山諸島にいたる経済的なネットワーク、すなわち琉球王国の版図の基礎を築き上げたことが明らかになっている。また、沖縄諸島以南の形質人類学的な知見によれば、11~12世紀以降のグスク時代の人骨は、それ時代以前の貝塚時代の人骨からは大きく変化し、骨格、顔のプロポーシオンなどの点で、本土中世人とほとんど変わらないものになるという。

こうした事実は、グスク時代から琉球王国成立にいたる過程が、外的な衝撃によってもたらされたものであり、『おもろさうし』から導かれた結論と概ね一致するのである。

ここにたってグスク時代以降の外的衝撃によって琉球語の形成、あるいは現在にいたるまでの文化の基本的な枠組の形成を促した可能性を考慮しなければならなくなる。その場合、琉球語の中に未詳語が多くあるとは言え、あくまでも日本本土語と同じ言語とみなしうるのはなぜかということがやはり問題になる。すでに1980年代に言語学者(中本正智)によって構想されていたように、

東アジア一体に「東アジア古層語」があり、それが中国沿岸、日本列島、朝鮮半島という東シナ海をめぐる地域に展開していく過程で、すでに「日本語」と同一の根幹構造を持つ言語が形成されていたとすれば、その中から日本本土語が成立し、やがて11～12世紀頃に琉球へと展開したとしても、琉球における本土語の受容は容易だったのではないとも考えられる。今後も継続すべき検討課題であるが、これまで揺るぎないとされてきた「姉妹語」説の根拠も、全面的に見直されつつある。

ここにいたって「日琉同祖論」とは何か、ということが改めて問題になる。

すでに述べたような過程を経て沖縄諸島以南の言語・文化が形成されたとすれば、琉球王国成立期前後の琉球と、源為朝が琉球国をつくったとする伝説（為朝伝説）とのかかわりを無視することはできない。為朝伝説は島津支配以降（1609年以降）に著された琉球におけるはじめての正史である『中山世鑑』（1650年）の編纂者であり日琉同祖論者である向象賢に結びつけて語られることもあるが、袋中上人の『琉球神道記』などにはすでに語られており、いわゆる「古琉球」期には存在していたのである。これは『保元物語』（鎌倉前期）からの借用だと考えられている。しかし、それが支配者側の借用と改変の産物であったとしても、アンチ・ヒーローとしての為朝を自らの始祖として語り始めたのはなぜかということが問題になるはずである。いずれにしても、この点で、グスク時代以降の琉球における人やモノの受容という事実と「日琉同祖論」の存在を整合的に捉えることが可能になる。

もちろん、そうした民族意識が近代期まで存在していたというのではまったくなく、すでに述べたように、近代期の「日琉同祖論」は政治的な言説にほかならない。ただこれまでの「日琉同祖論」批判が指摘するように簡単なものではなく、かなり深いところに根がある可能性があるということは考慮すべきである。

そして、このように認識することによって、少なくとも文化の問題に限って言えば「日琉同祖論」を簡単に「否」として退けるだけではなく、研究の射程に入れることによって琉球・沖縄への地域認識・歴史認識の多様性が生まれる道がひらかれることになる。

この点について、今少し具体的に述べておきたい。

本土文化と琉球・沖縄文化に差異があるのは当然である。文化そのものの成り立ちを考えただけでも、琉球・沖縄文化は中国南部、台湾以南の島嶼世界、日本本土、朝鮮半島などの文化が重層して形成されてきたのであり、また王国の形成という画期によって独自の文化を育ててきたのは明らかである。しかし、その一方で、なぜ本土の文化と琉球・沖縄の文化を地続きのものとする一連の論考が一定の成果をあげ、かつ本土、沖縄双方の研究者に受容されてきたのかについても考える必要がある。「日琉同祖論」は本土と琉球・沖縄の文化の同質性を与件のものとするが、逆に「日琉同祖論」を否とする立場は、原初論的に本土と琉球・沖縄文化は別個のものとして固定化させることを意味する²⁾。

琉球・沖縄に限らず、あらゆる地域の文化にかかわる研究は、さまざまな視点から、その文化について語る中で、「集約してみるとこれが本質的かもしれない」というものが事後的につくられ、議論を通して絶えず更改されていくものである。文化自体も絶えず変化し続けるものであり、他者とのかわりにおいて自文化をどのように認識しているかによって文化的アイデンティティもつねに変化し続けていると考えなければならない。

したがって、琉球・沖縄文化を何らかの与件のもとに議論することには多くの困難さが伴うことになる³⁾。また、あらかじめ文化や言語の上で「異なる」とされる地域に境界を設定し、その前提のもとに「違い」を指摘する議論はトートロジーにほかならない。

琉球・沖縄文化に関する多様な議論を確保するためには、あらゆる方向に対してひらかれたものでなくてはならず、したがってさまざまな立場からの理解の仕方についての相互関係の検討を通して、文化を理解するための新たな視点を付け加えていくという方法をとらなければならないことになる。

2 多様な地域認識・歴史認識－メタサイエンスとしての沖縄研究

上記の議論の過程を踏まえてさらに以下のような目的を設定した。

琉球・沖縄という地域をさまざまな立場から眺め、それらの中にある認識の違いはどこにあるのか、なぜそうした違いが生じたのかを辿っていけば、今日の本土研究者、沖縄人研究者に見えていない新たな側面を提供することになる。ただし、認識の違いとは言え、論者の出身地や生活史、あるいは着眼点によっ

て、前提とする地域観自体が大きく相違しており、しかもそれぞれが地域の歴史や個人の経験に根ざした相応の正当性を持っているため、いくら議論しても平行線を辿ってしまいかねない。ことに、琉球・沖縄という地域を対象とする研究には政治力学が深く埋め込まれていることを考慮する必要がある。したがって、認識の違いは違いとして認めた上で、その間の関係性をいかに捉えて架橋するか、いかに調停するか、という議論を展開するという方向を採用せざるを得ない。

また、メタサイエンスとして取り組む以上、従来の「研究領域の知の枠組」に拠るだけではなく、新たな研究の方向性を示すものでなければならない。

こうした点を踏まえて、さまざまな立場からの琉球・沖縄研究という見取り図を作成すること、立場の違いによって生じるさまざまな認識の違いの間を架橋し、そのことによっていかに新たな視点を獲得するかということ、新たな知の枠組のあり方を模索すること、という三つの課題について議論を重ねてきた。

ここでは、その結果として作成した報告書の目次を掲げるとともに、全体的な解説を加え、議論の紹介としたい。

『いくつもの琉球・沖縄像』（『21世紀COE国際日本学研究叢書4』）

目次

- 1 高梨修「琉球弧をめぐる歴史認識と考古学的研究－「奄美諸島史」の位相を中心に」
- 2 吉成直樹「関係性の中の琉球・琉球の中の関係性」
- 3 與那覇潤「「糸満人」の近代－もしくは「門中」発見前史」
- 4 高橋孝代「「琉球民族」は存在するか－奄美と沖縄の狭間・沖永良部島をめぐる研究史から」
- 5 酒井卯作「幻の島－琉球の海上信仰」
- 6 リース・モートン「大城立裕文学におけるポストコロニアル－ハイブリッドとしてのユタ／ノロ」
- 7 スティーヴ・ラブソン「在関西のウチナンチュー－本土社会における歴史と差別・偏見体験」
- 8 坂田美奈子「多元的歴史認識とその行方－アイヌ研究からの沖縄研究の眺め」

これらはいくつかのカテゴリーに分けることができる。研究の新たな方向性を模索し、提示する論考（3、8）、政治性による研究の歪みを検討し、そうした歪みからいかに回避することができるかを模索する論考（1、2）、「日琉同祖論」に関して対極の関係にある論考（4、5）、沖縄という地域に自己の体験を投影する、あるいは文学の中に政治性を読み取る論考（6、7）である。

執筆者は、沖縄、奄美、本土のそれぞれの研究者、そして沖縄に切実な政治的なかわりを持つ外国人研究者である。

冒頭の高梨修論文「琉球弧をめぐる歴史認識と考古学的研究－「奄美諸島史」の位相を中心に」は、奄美諸島史とは、つねに支配者であった沖縄とヤマトの描く歴史の「暴力」に晒され続けてきたと指摘し、奄美諸島史を回復させるために、考古学研究を糸口に「ヤマト」と「琉球」という対立軸の根底からの解体を目指す。研究が現実の政治力学によって大きく歪められてきたことを明らかにするとともに、政治力学が本土、沖縄、奄美の三者間においてみられるように、入れ子構造のように際限なく続いていくことを示す。

編者の論文「関係性の中の琉球・琉球の中の関係性」の後半においても、沖縄／奄美のそれぞれの歴史認識の相違について言及しつつ、研究領域間、研究者間の対立を回避する方法は、歴史叙述を例にとつて言えば、みずから紡ぎだす歴史叙述の恣意性－時系列に沿って事実群を叙述する際に生じる特定の意味づけ－を認識することだとする。論文前半では、比嘉政夫の〈琉球民俗学の構想〉に対して、「日琉同祖論」の無意識的な受容について検討を加える。

実証主義の立場から従来の「歴史認識」の転換を目指す方向とは異なり、認識論レベルにおける歴史叙述の新たな展望を目指すのは、坂田美奈子の論文「多元的歴史認識とその行方－アイヌ研究から沖縄研究の眺め」である。アイヌ口承文芸からの歴史叙述への介入を模索する坂田は、歴史学という営みが客観的な「事実」を明らかにするというのみでなく、同時にその事実を特定の文脈において「意味」づけてしまうことの不可避性を指摘する。そのことを自覚した上で、これからの沖縄研究にとって必要なのは、「日本への包摂か、抵抗か」という既存の二項対立的な意味づけに収まりきらないような、より広範かつ多元的な文脈に目を向けること、それを通じて「沖縄史」を複数化していくことであると述べる。歴史研究が陥った諸問題に対抗するためのナラティブの

重要性、ナラティブによる多数の記憶の記録を行うという歴史研究の新たなあり方を模索する。

與那覇潤論文「『糸満人』の近代－もしくは「門中」発見前史」もまた、新たな研究の方向性を示す。

與那覇は議論の前提として、知識社会学や社会システム論の知見から「人間は既に自らにある知的枠組みを通してしかものをみないし、そうして観察された結果を通じて自身の認識論を再度強化するような、大いなる循環の中に生きている」と述べる。あらゆる人間の認識や言説は外部に広がる現実の世界を曇りなく写し取るというよりも、むしろ自分自身の存在を根拠として単に自己を再生産し続けているという。

與那覇論文は、そうした循環の中にありながら、なぜものの見方の転換が起るのかという疑問を發し、この「なぜ」という問いに対しての回答は困難であるが、「どのようにして」なら記述することができるとする。そして明治期から続いた「糸満人種」論争を取り上げる。みずからも「満子種族」を自称し、その他の沖縄県人からも、内地人からも「異人種・異民族」とみなされてきた「糸満人種」論が、「^{もんちゅう}門中」（祖先祭祀を軸に形成される父系的親族集団）をめぐる論争を契機に消滅していく過程を描く。言説空間の変遷史を描写する論考である。

沖縄研究を語る上で避けて通ることのできない難問に、すでに述べたように「日琉同祖論」がある。

しかし、「日琉同祖論」も「日琉同祖論」批判も、文化に限って言えば、それぞれ対象に対する見方の両極にすぎないことはすでに述べた。

酒井卯作論文「幻の島－琉球の海上信仰」は琉球における海に対する信仰の原点とは何か、海に対する信仰の多様なあり方を「ニライ・カナイ信仰」という枠組みに嵌め込んできた研究者の安易さを問う論文である。酒井の沖縄認識は「日琉同祖論」を前提としたものであると言えるが、しかし実際に論考を辿っていくと、「日琉同祖論」を批判する側の方に何らかの重要な見落としがあるのではないかと考えられる。「日琉同祖論」批判の一面性という問題である。

高橋孝代論文「『琉球民族』は存在するか－奄美と沖縄の狭間・沖永良部島をめぐる研究史から」は沖縄でも本土でもない奄美諸島、その中でも奄美と沖

縄の狭間に位置する沖永良部島にかかわる研究史を整理しつつ、エスニシティ論の立場から「日琉同祖論」の本質論的な「民族」「文化」に対する捉え方に対して厳しい批判を展開する。

対象に対する視線の違いによって、琉球・沖縄文化の描かれ方がまったく異なることを示す。

ポストモダン以降の諸言説を改めて振り返ると、「ある地域を語ること」にきわめて多くの制約が課せられている。コロニアリズム批判、「発話位置」をめぐる問題等をあげることができる。

坂田論文が歴史研究における「事実」から「意味」を生成させていく「錬金術」について指摘するように、恐らく、あらゆる研究領域は、同じような問題から免れることはできない。それはポストモダン以降の研究視角自体とても例外ではない。制約を課すことによって研究の自由度が狭くなるという問題が生じるからである。

本報告書では、スティーヴ・ラブソン論文、リース・モートン論文も収録した。海外に生活基盤を持っている（持っていた）研究者の沖縄へのまなざしを知り、どのように認識しているかを知ることが、研究にとっての新たな視点を獲得する上で欠かすことはできない。

リース・モートン論文「大城立裕文学におけるポストコロニアルーハイブリッドとしてのユタ／ノロ」では、大城立裕の小説に繰り返し登場するモチーフであるポストコロニアリズムと、それと不可分の関係にあるハイブリディティの問題を、「迷路」「神女」などの作品を取り上げて論じる。ユタもノロも宗教者であることに変わらないが、ユタとは民間において活動するシャーマンであり、ノロとは村落の公的祭儀における指導者である。大城立裕はユタにハイブリディティを象徴させ、ノロに沖縄の理想史観を象徴させる。そして、このハイブリディティは大城文学を読む上で重要な鍵になることを指摘する。

スティーヴ・ラブソン論文「在関西のウチナンチュー本土社会における歴史と差別・偏見体験」は、紡績工場への出稼ぎを契機に1890年代から始まった沖縄から関西への移住の、現在にいたるまでの歴史体験をさまざまな記録やインタビューなどに基づいて記述する。現在の関西在住の沖縄県人の若い子孫たちは「エスニック・プライド」を持っているが、しかし「沖縄」があまりにも

商品化され、「やさしさ」「のんびり」などの決まり文句が貼られるようになると、それらの言葉の裏には必ず否定的な意味を持つことになる。したがって、すでに公然とした偏見はなくなったが、潜在的な偏見の萌芽は広く存在していると指摘する。

こうした論考にみられるのは、政治性を強く持つということ、さらに自己の体験を沖縄研究に投影しているということであり、それは琉球・沖縄を語ることが政治と決して無縁でないことを物語る。

琉球弧の島々を表象することをめぐっては、デリケートな多くの問題を抱え込んでいることは、すでに述べた通りである。そして、それぞれの表象のあり方には正当性があると言ってよい。

こうした琉球弧に対する固定化された認識像ではない多様な認識像を知り、それぞれの間の関係性を検討し、架橋することを通して、新たな認識像を提示することができるようになる。それによって、よりいっそう琉球・沖縄に対する理解が進み、多くの対立軸からの回避するための新たな研究の視点を提供するものとも考える。

- 1 この成果は2006年1月に『琉球王国と倭寇—おもろの語る歴史』（吉成直樹・福寛美著、森話社）として刊行された。『おもろさうし』からの歴史復元の試みにおいては、アイヌの口承文学から「歴史認識」を復元する、近年の一連の研究が、重要な示唆を与えたことを付記しておきたい。
- 2 2003年8月にワルシャワで開催された第10回EAJISの国際シンポジウムで、沖縄文化研究所の専任、兼任所員、および国内研究員で行った「琉球列島における女性の霊的優位と御嶽信仰」と題するパネルは、この課題に関する活動の一環として行ったものである。「女性の霊的優位」という信仰は、琉球王国成立後の16世紀前半に神女組織が制度化された時点で王府主導のもとで成立したとする発表等を含む。
- 3 琉球・沖縄文化を異文化視することによって、その文化がより広い世界と結びつくこと、重層的な文化のあり方を理解することができる。こうした立場からの研究はすでに多くの蓄積がある。

ABSTRACTS

Outline of outcomes of the “Declaration of International Japan-Studies” 21st Century COE Research Program

HOSHINO Tsutomu, Josef KREINER,
ABIKO Shin, WANG Min,
YAMANAKA Reiko, YOSHINARI Naoki

The basic concept behind the formation of a center for the “Declaration of International Japan-Studies” is the development of Japanese studies as cross-cultural research. Building on this concept, the program has produced the following four main outcomes.

- 1) The first outcome concerns research approaches and methodologies, and is apparent in the adoption of a cross-cultural approach to Japanese studies through the incorporation of the perspectives of foreign researchers on Japanese studies (i.e., perspectives of “the other”). The construction of international Japanese studies is a meta-scientific venture that entails exploration of the conditions for the establishment of academic dialogue at home and abroad through dialogue between Japanese and non-Japanese researchers based on open approaches to research. This has yielded a model for international and academic collaborative research that overthrows the archaic *modi operandi* of the humanities in Japan—the closed, inward-looking approach and poor awareness of method—by founding a new academic discipline backed by

the clear methodology of international Japanese studies.

- 2) The second outcome has been the rediscovery of Japanese culture from a cross-cultural perspective and the opening of a new realm in Japanese cultural studies. Abroad, “Japanese studies” has consisted of research on Japan as “another culture,” and so has always incorporated a comparative element. This comparative perspective, particularly when it has taken the form of comparison between Japan and China, Japan and Germany, and Japan and France, has enabled the rediscovery of new and unconventional aspects of Japanese culture through the reinterpretation of Japanese culture itself. The location of *nō*, designated by UNESCO one of the “Masterpieces of the Oral and Intangible Heritage of Humanity,” within the framework of international Japanese studies and its reinterpretation from a comparative perspective has opened up new realms in *nō* studies, while the shift in interest to the southern boundary region of the Ryukyus and Okinawa has demonstrated that Japanese culture, rather than being a single uniform and homogenous culture, in fact consists of “many cultures” having multiple cross-cultural sources and a multilayered structure that extends beyond Japan’s borders to China, Korea, and other parts of Asia.
- 3) The third outcome has been the promotion of joint research activities on a global scale through the sharing of research data in real time and effective use of networks with researchers and research institutes in Japan and overseas. To assist in this process, content of value to Japanese studies has been converted to electronic format to create an electronic library system accessible to researchers from around the world.
- 4) Finally, the fourth outcome has been the development of researchers in

the field of Japanese studies who are equipped to communicate their findings to a wider domestic and international audience, achieved by applying the fruits of the “Declaration of International Japan-Studies” COE Program to postgraduate education at Hosei University’s Institute of International-Japan Studies